

## 《第4回全体学習》

同和問題（道徳）学習指導案

1993年9月30日（木）5校時

3年C組 指導者 山口 智恵子

1. 主 題 真実に生きる

2. 主題設定の理由

中学校に赴任2年目にして3年生担任となり、その重責に対する大きな不安を、空威張りの闘志でどうか打ち消そうとしていた4月当初。受験を控え、教科指導に力を入れなければいけない、それに3年生は同和教育で全体学習をやらなければいけない、そんなふうにはか捉えられていなかった年度初めだった。その当時の私にとって、文字どおり、やらされる同和教育だった。

前年度、（今の3年生が2年生の時）、全体学習の司会をする私に、うつむいて反応しない、長い沈黙。耐えかねて指名すると「分かりません。」そのうちに、横どうしてつつきあいをしたりしてふざける始末。私は、自分の態度、心の中を省みることをせずに、そんな子どもたちの様子を、『友達的事に無関心で、自分の意見を持たない日和見主義な生徒たちだ。』などと批判していた。そして挙げ句の果てに、全体学習に対して、美しい言葉、きれいごと、口先だけの言葉が飛び交う偽善学習だ、とさえ思いこんでいた。そして、心の学習をこんな大勢で行う事に不満さえ感じていた。じつくりとクラスで生徒と向き合って育てていくものだ、などと自分勝手に理屈をつけていた。

3年C組34名。昨年からの顔なじみも多く、生徒たちの心も早くつかめそうだ、などと今から思うとずいぶん楽観的な出会いを私はしてしまっていた。それぞれに心が揺れ動く年頃であることは十分承知しながら、一人ひとりがどう思っているか、どんな悩みを持っているか、深く測りもしなかった。そして私の同和問題に関する捉え方も、前述のとおりであった。

こんな私のところへ、「これ、よかったら、読んでみてください。」と森口先生から手渡された1冊の本。この「よろこび第2号」は、私の今までの考え方を根底から大きく覆すものであった。「さあ一つと、一気に読めると思いますから。」という森口先生の言葉とは正反対。私は、もう2ページ目から進めなくなっていた。「スダチの苗木とキンカンの苗木」と題された第1章の1から、胸の奥底をぎゅーっと絞るような、心が萎んでいくような打撃を受け、呆然としてしまった。息が苦しくなるほどのショックだった。一言一言が私の心を押しつぶしていくようだった。あふれてくる涙と、書かれている言葉の重さに、本を閉じてしまっていた。

自分の中にあつた思い（今から思うと、あれは黒く潜む差別心だった。）を突きつけられていた。

次にこの「よろこび」を開くには時間がかかったし、勇気が必要だった。また最初から読むと同じように心が押しつぶされそうだった。しかし、ぎゅーっと痛む胸をかかえながらも、「よろこび」という西口敏夫の詩に到達したとき、はつとするものがあつた。「きびしい茨の道なれど、この道は我が生涯のつとめなり。」苦しみ、厳しきから逃げずに生命の生きがい、生命のよろこびとする。これは、「今のこの苦しい想いから逃げてはいけない。自分にとって厳しいこの本だけど、読み進まなくては。自分の中にある差別心と向かい合って、自分のみにくさをむき出しにしていくのは、つらい、逃げたい、でもそれでは今までの私と変わらない。厳しいけど面と向かっていこう、より美しく生きるために。」ということを私に伝えてくれるものだった。

そして、私は森口先生の思い、生き方にできるだけ触れていこう、自分の心をごまかさずにどれだけ見つめられるかやってみようと思決心した。

最上級生になり、新しい仲間たちの中で、生徒たちはやはり期待に心躍らせるものがあった。新しい環境に希望を見いだしているように見えた。

第1回の道徳の資料として「峠」の詩（真壁 仁）を使って話し合いをする。学級開きの題材としてこの資料を使うという森口先生の薦めにより、試みることにしたが、最初は私自身、この詩をどう捉え、生徒たちに何を捉えさせて行くか悩んだ。ぼんやりとしかこの詩のいわんとすることが分かっていなかったが、生徒たちにいろいろと考えさせようと聞き直り、授業となった。

やや難解な語句が並ぶ長い詩を黙って黒板に書いた。後ろ向きになっていても背後の生徒達が一心にその詩の内容を読みとろうとしているのが分かった。このことから生徒たちの新学期への意気込みが察せられた。

※

やっぱり最高学年で入試という大きな峠が待ち受けているので、家庭学習をがんばろうと思っています。近ごろ教室でいるとすごい緊張感があります。もう1、2年の頃とは違うなあと感じています。自主勉強をしっかりとこつこつとがんばっていこうと思います。今までのように時間を無駄に使わないようにしようと思っています。早く入試という峠を越えたいです。

※

私は今一つの峠を越えようとしている。峠をこえるためには苦しいことに耐えて我慢しなければならぬ。それに人生の上での峠には我慢するだけでなく積極的に何かを勝ち取っていかなければならぬと思う。今まで「人生を左右する峠はまだまだと思っていたのにあつという間に峠が来たので心の中では少し焦りがあります。今の大事な峠を越えるため、時間を大切にし上手に使いたいです。峠を越えた後もまた次の峠に向かえるよう道を開いていこうと思います。

※

このような作文からも分かるように、最初は半数以上の子がこれから立ち向かわなければならぬ受験を峠という捉え方をしている。しかし中には次のようにするどく心を見つめている者もいた。

※

私は毎日後悔していますが、やりたいことをやらずに後悔するよりも、やりたいことをやって後悔したほうが良いと思います。だから自分はいつも正直に生きて、何にでも挑戦して生きたいです。この峠の詩のようにこれから私が生きていく中でつらいことはたくさんあると思います。きっと峠は私が死んでしまうまで続く大きな試練だと思います。でも私はそんな峠につまづいて動けなくなるような生き方はしたくありません。誰も助けてくれなくなったとき、私は強くなれるんだと思います。今自分の人生を考えることでこれからの自分がどんなふうになれるか。それは私次第です。私は峠の向こうにはきっと喜びがあることを信じて、時にはつまづきながらも登って行きたいです。何かを信じて登って行けば、きっと峠は越えられると思います。

※

「峠」は自分自身であり、自分の心である。今までのりこえてきた「峠」は全てが自分には大きい「峠」ではなかったかと思う。「峠」を越えるのは勇気のいることです。この「峠」というのは自分自身にとって深く重いものをさして言うんだと思う。自分で開いてきた道を、私はまた戻って行ってしまふところでした。たぶん昔の自分に未練があるからです。しかし一旦通ってき

たものは決して引き返すことのできないものなんだと思います。時は常に流れています。今の私の前には越えなければならぬ苦しい重い「峠」がいくつもあります。しかもその「峠」は私を苦しめるような分かれ道や落とし穴をつくっていてすごく悩む道になります。でもその「峠」を登っているときにつまづきたおれたとしても、それはまちがいではないと思います。そのいたみをかみしめたまま起きあがったとき、「峠」の中の小さな「峠」を乗り越えたことになります。

私は、人生という最大の「峠」の中にまた小さな「峠」や大きい「峠」があるんだと思います。自分を信じ信じて歩いて行けば落とし穴は消えると思います。発表することは私にとってはまだ大きい「峠」です。でもその「峠」は絶対に乗り越えなければならないものだから自分を信じて乗り越えようと思います。

※

この話し合いの後、学級の級訓『為せば成る』が決定した。（私としてはこの次の言葉の「為さねばならぬ何事も」の方が今のこの子達にはあっていると思ったのだが・・・。）

自分から行動を起こさない限り、待っていてはだめ、誰かがしてくれるのを待つのでは物事の解決にはならないんだ、ということ、これは同和問題に取り組む姿勢そのものであると思った。

仲間に無関心でいてはいけない。話しもしないでいて周りの友達の良さなど分かるはずがない。しかしこういった私の思いは空回り、いつも決まった子と何をするにも一緒。中には前のクラスの仲間と違うクラスになっているにも関わらず、休み時間ごとに友達のいるクラスにいつまでもいる。これでは新しい友達を知ることができない。同じクラスでありながら、仲間のことに関心を持たない。これは思ったことが言えないことにつながっていく。本当のことが言える雰囲気づくりをしなくてはならない。

そこで、一人一人のことがみんなに分かるようなもの、たとえば1分間スピーチのようなものはどうだろうかと考えた。しかし、身構えてしまう子が多く、口の重い今の状態ではかえって逆効果になりそうで、これは期待できそうになかった。

話すのに比べて、書くのであればそう抵抗はないだろう、それぞれの個性も表れるし、残っていくものであるしということで、学級新聞「碧空」に取り組ませた。稚拙でこちらの意図するような内容はなかなか出てこないが、継続は力なりを信じて、毎日一人ずつの担当で発行している。なかなか趣味の範囲を出ず、心の奥底を見ることはできないが、相互理解の一助になることを信じて続けていきたい。

第1回の全体学習「母の願い」に向けて、クラスで話し合う。こちらからは指名しない。自ら手を挙げ発表できた者5名。学習プリントを見ても、半分うまっているのがやっとなという状態。発表するのも学習プリントの内容にこだわっている様子であった。

※

一番に思ったことは、「私は部落の人間です。」と堂々と言える世の中にしていくことができたなあということです。自分の子どももその子どももずっとずっと部落であることがつらくてしかたない、そんな世の中にしたのは私たち周りの人間です。部落差別という事実を知っていながら自分は関係ないふりをする。私も「部落は悪い人の集まり」とか聞いててなんか差別心持ちました。でも友達は何もない子だった。疑った自分が恥ずかしいです。私の友達にもたくさん部落の子はいるけど、もう本当に心からその子のことを信じています。その子がそのことで悩んでいたならその悩みを半分でも一緒に悩みをしょってあげられる、取り除いてあげられる友達になりたいです。口先だけでなく心で話がしたいです。

※

この全体学習を目の前にひかえた南会場での学習会。会場について挨拶をしたとき、「あれっ」ともう一度顔を確かめてみた女の子がいた。今まで一度も見かけなかった生徒だったからである。そして話し合いでの声を詰まらせながらの彼女の言葉が、私の心を激しく打った。今まで学習会に來れなかった心の内を語るしぼりだすような声が胸に迫った。涙が止まらなかった。なぜこんなにつらい思いをこの子たちがしなければならぬのだろう。こんなつらい思いをしている子どもたちを前に苦しめないでどうするか。こんな涙を二度と流させないためにも私は差別をなくす努力をしなくてはならないと自分に誓っていた。自分が苦しいことから逃げていてどうして一緒に語っていけるだろうか。

※

#### 第1回全体学習。「母の願い」

この日の全体学習で、学習会に対する思いを語るA子の言葉に、私は思わず手を挙げ、そして、全体学習を偏見でみていた今までの自分の態度を話していた。

これまで何が自分にできるのだろうかとばかり考えていた。自分の中を見ずに外へ働きかけることばかり考えていた。

クラスで発表しない子どもたちにいらつきながら、どうすればしゃべるようになるか、その対策ばかり思い巡らしていた。

そうではなかった。自分の心に対峙しなければならない。まちがいだらけの自分を語ることから始めなければならないのだ。

まず私からだった。

※

今日の全体学習で、同じ柔道部のSくんやFさんの発表が何度も見られました。自分達の熱い想いを心から言い表せています。そして1時間経ち、次の全体学習へ進みます。

始まってすぐ何人かの手がぱっと挙がりました。そして緊迫感のあふれる中でいろいろな発言が飛んでいます。残念ながら僕の手は挙がりそうにありませんでした。この全体学習の前日に森口先生に「先生は命張ってこの学習に取りくんどる。決してちゃらちゃらした気持ちでやりようわけでない。あすは最低でも3回は発表するんぞ。」というお言葉をもらいました。でも森口先生を裏切るかのように時間が経っていくだけで終わりつつあります。

次に学習会での話題に入りました。同じ会場のTくんとHくんが想いを打ち明けました。うちの会場の人数は3年生が4人、4人中1人はまったく来なく僕たち3人がいます。たったの3人なんです。不思議に誰もが思うでしょう。小学校の時はおよそ7、8人はいました。やめていく友達を見て、塾だの、つまらないだの、事情があることを言っていました。それは今気づきました。差別だったんです。どうせ親が言わせたのでしょうか。自分の子どもを苦しめたくないために。確かにその子の親は子どもを守りたいからした行いだと思います。ですがその時点で逃げています。他人のことなど考えない、自分の身とわが子が無事ならそれでいい。そんな人たちがいるからこそ差別はいつこうに減りません。無くなった無くなったという社会に腹立たしいものがある。決して差別があっても幸せな人など一人もいないはず。たとえ一部が幸せでもその一部のために大勢の人たちがもがいているということがその一部の人たちは見えないんです。今日の学習で何人かががんばっていきたい。といいましたが、この中で何人が森口先生のように生命を張って闘えるでしょうか。この人達の力によって今後の状態が変わるかもしれません。

当然僕は部落民です。今は差別は受けません。でも社会には差別があります。そのときこそ板中で学んだことを力の限り見せたいです。

※

心臓の音が全身に響いて、死ぬほど緊張してずーっとドキドキしていた。「手を挙げよう。」と何度も思った。でも結果的には発表せずに終わってしまった。情けないの一言だった。でも本当に発表しようとしたし、こんなに一生懸命取り組めた全体学習は初めてだったと思う。

今日の全体学習は私たちが3年生になって一番最初だった。それにしても意見もなかなか出たし、私の友達も発表していた。なのに私は全然ダメだった。授業の中で何度か涙が出そうになってきた。誰の意見を聞いてか忘れたけど、なんとも言えない全体学習でした。

私は今日の全体学習に一生懸命取り組みました。でも私はこの全体学習に参加することができませんでした。確かに人の意見も聞いてその事を考えたり「あの子は、あんな意見もとんやなあ。」とか思ったりしたけど、結局発表はできなかった。お客さんみたいにみているだけで、何もできなかった。

※

全体学習後の作文では、ほとんどの生徒が、発表しなかった自分に後悔したことに触れていた。心の中で「峠」を越えようと必死に戦っていたようであるが、結果として発表できなかった自分に情けなさ、悔しさを感じていた。仲間のつらい、せつない想いをそのままにさせないためにも、弱い自分を思い知れ、友達の信頼に応えられなかった無念さを決して無にしてほしくはなかった。弱い自分を知ってそこから一歩ずつはい上がっていく努力をしてほしいと思った。

「発表する人の意見を聞く真剣なまなざしの中に、心の中は思いでいっぱいなのは良く分かった。自分の心の中を見つめて葛藤しているのが伝わってきた。しかし、自分の峠に打ち勝とうと勇気を振り絞って発言した友達の思いにつなげられないのは、川で溺れている人を流されていく人を心の中でかわいそうに、気の毒にと思うだけで何もできないのと同じなのではないだろうか。友達のつらさ、苦しみ、やるせない気持ちを思ったら、自分は楽なところで涼しい顔してのんびり座ってられるわけがない。そんな人が一人でもいたら、本音なんて語れない。そう思わないか。私は弁舌さわやかではない。言っていることが前後したり、ポイントを得た話しができないが、何かを言わずにはおられない。差別に苦しむ人がいる限り、私は自分が傷つくことをおそれてはならないと自分に言い聞かせている。涙ながらに想いを語る仲間の心に応えられているか。」と私は想いを吐き出していた。

そして次の日、数学の授業で、いつもなら指名されなければ発表しないのに、手を挙げ問題に答える生徒が7名もいた。弱い自分を鍛えようとする姿が見られた。

※

第2回全体学習。「自分以下を求める心」

クラスの話し合いの時、思いきって手を挙げたら言えたので、全体学習の時も挙げてよと思ったら、クラスの時とはまた違うものに押さえつけられたような感じでした。1、2年生の時はクラスでの話し合いでは1回も発表したことがなかったです。

今日初めて手を挙げるとき手が100トンのバーベルなみに重かったです。それに真っ白になった頭の中で思ったことをいうのは大変だったです。

先に書いた「押さえつけられる気持ち」というのが、まだみんなを信じていなくて、必死になっていないということと分かりました。

僕は「語る」ということはまだまだけど、クラスのみんなとの話し合いや全体学習とかで確実に一步一步進んでいきたいと思います。

仲間になれるようにがんばりたいと思います。

※

僕は、全体学習が終わったすぐ後は、すごいこみ上げてくるものがあるけど、数日経ってしまったら、なんか全体学習の時の想いがなくなっているように思います。まだ同和問題を全体学習だけのものにしていて自分では思います。

※

#### 校内同和問題意見発表会

第3回全体学習「意識の芽生え」を学習するにあたり、自分と部落問題との出会いを明確にさせるために、部落問題をいつ、どこで、どのように、誰から聞き、その時どんな想いを持ったかを思い起こすことから始まった。

その中に、自分が部落の人間であることを、母から知らされた際のことを書いたF子の文があった。私はこのF子の文章に力強いものを感じ、意見発表会に出ることを薦めた。少しためらった後、やってみると答えるF子の胸の内を、私はその時深く理解できていたつもりであった。大勢の前で部落宣言をするF子の気持ちを一緒になって考えたつもりである。文章で書くのと、大勢の前で話すのでは格段の差があるにもかかわらず、こんな重大な決定を本人にあずけて、「お家の人に話してみてね、相談してみて。」と言っただけで、私の方からご両親にそのことを相談していなかった。学年での発表会に出るという返事を聞き、この強い思いにあらためて胸を打たれた。しかし、この決心はF子自身だけによるもので、両親にきちんと話をしたの結論ではなかったのであった。そのことを知らず、F子の堂々とした様子にただ喜んでいた私であった。

その後、F子が学級代表に選ばれ、発表会を月曜日に控えた土曜日のことであった。帰りの会を終えたばかりの所へ、F子の母親から電話が入る。全校生徒の前での意見発表はやめさせてほしいとの電話であった。

「F子は発表すると言っているが、何も自分から言うことではないのではないかと思う。なんか恥を全校のみんなにさらすようで私としてはやらせたくない。F子は『そんなことやから差別がなくならんよ、母さん。』と私に言うのだが、私としては、板野中学校では熱心に同和問題学習しているけど、卒業して高校に入ったらそうでなくなるという噂を耳にすると、F子が将来つらい想いをするだろうし、それを考えたら自分が部落の人間であるっていうことをみんなに知らせるのは、やっぱりしてほしくない。」

という母親の言葉に、私は愕然とした。自分の安易な受けとめ方で、F子を、両親をこんなに苦しめてしまったことに自分の浅薄さを呪いたい気持ちだった。そして差別の重さを知らされた。きっとこの電話をかけるまで、母親は悩み抜いたことだろう、そして、差別に立ち向かおうと立ち上がったF子も、両親との確執でずいぶんつらい想いをしたに違いない。しかし、F子はそんな経緯があったそぶりを帰るまで全然見せなかったのである。

この日はF子の想いを受けて、クラスが熱く想いを語る時をもてた日であったのである。F子が踏み出してくれた一歩にみんなが歩みを揃えようとした日であった。

「F子一人の戦いにしているのか」という私の言葉に何人かが応えてくれた。

※

1時間目は本当によい時間だったです。先生からF子さんのことを聞いて、F子さんて学校で

は楽しくしているけど、本当は大きな悩みを持って苦しんでいたんだなあと思いました。けどそんな悩みも吹き飛ばし母に言ったというのを聞いたときは強いなあと思いました。そして誰もが発表せず時間が経っていました。けどGさんが手を挙げ少しずつ発表していきました。僕もせなあかんと思ひ手を何度も挙げようとしたけどすごく重かったです。Hが発表したあと自然に手が挙がりました。それからは覚えていません。何を言ったか分かりません。言い終わって座ったら頭の中が真っ白になりました。そのあともみんななどん手を挙げていました。本当に良かったです。本当に3Cの仲間と一緒に大きな階段を少しずつしっかりと登っていこうと思います。

※

1時間目の時、私はいつも友達の前表面だけしか見ていなかったと思いました。Fちゃんのいつも明るいところばかり見ていたので、Fちゃんが言ってくれていなければずっと知らずにいたと思います。Fちゃんが信じて語ってくれたことに応えられなかったのが情けないです。自分の思いを言えるようにしていきたいです。今日の1時間目は、先生の思いを聞いて、すごく自分がいやになりました。私はとなりに苦しんでいる人がいても、素通りしていつているのだろうと思います。もっと自分のことを表に出していきたいと思っています。

※

今日数学の時間はつぶれたけど、すごくいい時間になったと思います。自分もFちゃん支えてあげられへんかったことすごい反省し、一緒にがんばっていけると思うし、ほんまに思っとうこと言うってことはすごいたいへんなことだけど、仲間信じとうけん、みんながんばって自分の考えが言えたんだと思います。みんなで真剣に取り組んでこの授業絶対忘れんとうがんばっていこうって思います。

※

もっと言いたいことはいっぱいありました。でも声が詰まって少しか言えませんでした。私は作文にもFちゃんのことなんて一言も書いていませんでした。発表するのはすごく勇気がいったと思います。Fちゃんの気持ちも考えずにいたなんて自分が情けなくて泣いてしまいました。先生も本音を語ってくれてすごくうれしかったです。みんなの今日の涙は本物だと思っています。みんなと一緒に戦っていけるような気がします。がんばりたいです。

※

今日、教室がとても好きになった。女子は話し合っていると次第に涙が出てきた。男子は男だから涙なんか流さなかったけど、きっと今日から1つ変わったと思う。先生の言葉は今日はいろんな想いが詰まっていた。言葉でどう言ってもいいか分からないけど、何か心が熱くなってきているのに気がついた。Gさんの言葉はぐっときました。そして、Hさんの勇気にもうれしかった。この時間の中で私は必死で涙をこらえて絶対泣かなかった。涙は勝ったときまで取って置こうと思ったからです。そしてまた、Fちゃんの気持ちをいつまでも心に残しておきたい。

※

みんなを信じて語ってくれたF子の思いをむだにしたくはないし、3CとしてもF子に伝えてみんなががんばろうというとても良い雰囲気になっている。F子の力強さにどれだけ励まされているかを母親に説明したが、結局母親のせつない気持ちを思うと「今日の1時間目、みんなで話し合いました。Fちゃんが投げかけてくれた言葉に答えて、クラスでもがんばっていこう、という熱い想いになりました。Fちゃんの勇気を決して無にしないよう、って。もう一度、Fちゃんと話し合っただけですか。そして出された結論なら、しかたがありません。」としか答える

ことしかできなかつた。

クラスの声援を受けて明るく帰ったF子を待ち受けているのはどんな言葉なんだろう。

F子の心を翻弄する差別の現実を思い知らされた。

F子が一層傷つくのではないかと心配だった。

しかし、F子の将来を案じる両親の気持ちを思うと押し切れなかつた。

同和教育担当の富加見先生、阿部先生にこの出来事を相談したところ、ご両親と話してみようと言ってくださり、早速その日の内に、学年で行われた意見発表会のビデオを携え、一緒にF子の家を訪れてくれた。

すでに母親とF子の話し合いは終わっていたようだった。

何かこだわりの抜けきらない母親に、ビデオを見てもらう。

くいいるように画面を見つめる母親の横顔に、私は自分の思慮の足りなかつたことでこんなにも心痛む想いをさせたことをただ反省するばかりであつた。そして、しばらくの沈黙の後、「Fちゃん頑張りよ。」という母親の言葉を聞くことができた。

そして、月曜日。いつものように明るく登校してきたF子を見て、両親と一緒に一つの峠を越えた様子をうれしく思った。意見発表会、各クラスの代表に混じり、堂々と意見を述べるF子の姿を見ることができた。

※

3年生の発表ではやっぱりFさんの発表が頭に残っています。前回の発表とまた違った内容だったのです。真剣に聞いていました。その中に前にはなかつた部分がありました。「数学の時間だったけどみんなで話し合つてそれを聞いて決心しました。」これを聞いたとき、あの土曜日の1時間目のことが頭の中に広がり思い出しました。本当に良かったと思いました。あの土曜日のこと。あのとき3Cのみんなが発表しなかつたら今のF子さんはいなかつたと思います。3Cのみんなで勝ち取つたもの、その代表がFさんでした。先頭に立ち第一歩を踏み出してくれたのもFさんでした。

※

この前、数学の時間にした同和問題学習はとてもつらかつたです。みんなが泣きながら言つてくれました。その中でGさんは泣かないで発表しました。その時僕はGさんが見せかけだけで発表したように感じました。だけど僕はそれがまちがっていることに気づきました。泣きながら発表するのよりあの場面で泣かないで発表することの方が何倍も難しいと思いました。僕は発表できませんでした。ものすごく苦しかつたです。あのときほど苦しかつた同和問題学習は今までになかつたです。

※

3年C組の代表として発表してくれたFさんの言葉は、なんか心に迫ってくるようでした。すごい苦しかつたんだろうけど、発表してくれてすごいうれしかつたです。

僕は、Fさんが両親の反対を受けたのは知っていたけど、説得したというのは知りませんでした。僕はFさんの発表の中の「先生と3Cのみんな」というところが、すごく信じていてくれていたんだと思つて本当にうれしかつたです。Fさんの発表する前と後に、横の子は励ましたりしているように見えました。これが仲間なんだと思いました。ただいつも楽しそうにしているだけの友達でない本当の心の友達なんだと思いました。

いつも、全体学習や今日みたいな意見発表会で、自分が良くなっていくように思います。でも、

自分以外の人の思っている苦しみはまだ自分のこととして思えないところがあります。自分がどんな人間なのかも分からないところがあります。けど自分を磨いていく中で人の苦しみを分かって自分を見つけていきたいです。いつも作文を書く毎に、目標は少しずつ変わっていると思うけど、自分を良くするということが僕の全部の共通点だと思います。

※

クラスの代表者16名の堂々とした意見を、真剣に聞き、共に戦っていこうという意を強くした者が多かった。特に、自分達の1、2年の頃の意識よりしっかりしたものを持っている下級生の発表者の意見に感銘を受けた者も多かったようだ。

「『部落の人間です。』というたった数文字入れるのにずいぶん悩みました。」「差別した人じゃなくて、人の痛みが分かる人を先祖に持ったことを誇りに思う。」「差別されて我慢する人が強い人ではない。」「自分には関係ないというのが私の差別心の芽生えです。」

このような言葉を心に刻みつけると共に、3Cを、板野中学校のみんなを信じてくれた、3Cを一步前進へと導いてくれたF子や両親の想いを、決して裏切ってはならないと思った。

※

### 第3回全体学習「意識の芽ばえ」

ほとんどの者が小学校の高学年で同和問題を学習したときが、意識の芽生えだと捉えている。しかしよく思い返してみると、もっと以前に、大人達の話の中から、何か触れてはいけなものと感じたり、家の人の言葉の中にある不自然さを悟ったりする中で、少しずつ体の中に入り込んだものがあつたようだ。

家族との会話の中に不合理を見つけ、何かどこかおかしいと思いつつもそれをはっきりと正せない自分を思い返す生徒もいた。

全体学習の場で、自分の母のことを語るうち涙で声をつまらせ、それでも苦しい胸の内を語ったI子がいた。

日頃差別はいけないと言っていた母が、自分の友達のことであまり親しくなつてはいけないというようなことを言われ、ずいぶんとショックを受けた。その時はきちんと問い直しができなかったが、もう一度きちんと母親とそのことについて話し合いたいと発表した。

自分の家族が差別者であることを大勢の前で言うには大変な勇気がある。親に対して、それはまちがっているときちんと反論できなかったことは、自分の中に差別心が巣くっていたからだということに気づいた。そして、「戦っていかな自分の存在がなくなるぞ。」という吉成先生の言葉で、ここで発表することがその第一歩だと立ち上がったのだ。

その夜、I子の母と電話で話す。「今日の全体学習でI子は本当に良くがんばった。」と言うと、もうすでにI子は話していたらしく、「私はそんなこと言った覚えがないのですが、I子はそう受け取ったのですね。」と残念そうにその時の経緯を話してくれた。親子が話し合い本音をぶつけ合うことでより一層家族の絆が深まるように、クラスでもそういう取り組みをしていかなくてはと思った。

このI子の想いを受けて、次の日のクラスでの話し合いでは、差別心を持っている家族のことを打ち明け、その家族に対してまちがいを正せなかったことを語る者が何人かいた。いくら言っても分かってくれないので家族が嫌いになったという意見や、もう何を言っても聞く耳を持たない祖母にあきらめていたが、何度でも言っていきたいという意見があつた。意識の芽生えが家族と接する中でできてきたと発表する生徒が多かつた。こういう家族に対して自分の想いを伝えて

いく、これがスタートだということを確かめ合った話し合いだった。

※

この3年間、同和問題学習をしてきて想ったことを家族で話し合いました。私が「〇〇ちゃんと遊んでくるけん。」と言うと、必ずと言っていいほど、「その子、どこに住んどん。」と私に聞いてきます。「〇〇の方にすんどうよ。」と言うと「あの子とはあんまり遊ぶなよ。」とか、「その子の家には行ったりしたらあかんよ。」とか言われました。だから私は「なんで。」と聞くと、「部落の子やけん。」と言いました。私は怒りがこみ上げました。「ほんなん、差別やわ。差別したらあかんのよ。」と言いました。でもおばあちゃんは差別心がとても強く「少しは差別心もつかなあかん。」とって一歩も譲ってくれませんでした。でも私はそのおばあちゃんの言葉を無視して、〇〇ちゃんと遊びました。それをおばあちゃんに見つかりました。おばあちゃんは私の友達の前では愛想を振りまいて、私が家に帰ると「何であの子と遊ぶんな。遊ぶんやめとけ言うただろ。」と言って私をおこられました。でも私はおばあちゃんに言いたいことがいっぱいあったのでその場で言いました。けれどおばあちゃんはやっぱり一歩も譲ろうとしませんでした。私がこのことをお父さんに言うと、おばあちゃんと同じことを言いました。私はその時なんで大人はこんなんばかり言うんだらう。なんで差別をなくそうとせんのだらう。疑問が残りました。これについて、私がたずねても、その日から、聞こうともしてくれませんでした。その時すごくつらかった。けれど、その時、絶対差別をなくさなあかんと思いました。そして、私は目標を立てました。それは、まず私の家族の部落差別をする心を無くさせることです。少しでも減らせるように努力しようと思います。私は時間がいくらかかっても、まず初めは家族の差別心を無くしていけるようがんばりたいと思います。

※

文化祭での人権劇「私の目を見て！」への取り組み

全体学習も3回、それ以外の話し合いもたくさんあり回を重ねる毎に想いを語れる生徒が増えてくる中で、いつも下をうつむいている、作文もほとんど書かないJ男。学習会に全然行っておらず、かたくなに口を閉ざしているK子、L子。いろいろな想いがきつとそれだけ複雑に渦巻いているのだらう。この三人の立ち上がりこそが3Cの本当のスタートだと思っている。

これからきつとやってくるであろう出来事を題材にした劇をクラスで取り組むことで、少しでもこの三人が今の状態から立ち上げられるようになればと始めた。

「とうとう来た。人間として価値のある者であるかどうか試される時が来た。」この場面できつと何度と無く遭遇するであろう。その時はつきりと勝子のように真実を貫ける生き方ができるような力を持ってほしいと願う。

※

「私の目を見て！」の役が決まったとき、正直言って抵抗がありました。差別する側の役、というのが一番の抵抗でした。でも今となつてはこれが私の役なので、ほかのみんなの足手まといにならないようにきちんと最後までやり遂げられることを目標にしています。今までの私は差別する側でなくその他の役がやりたかった。他の人の目を気にしていたからです。はつきり言ってそれも差別じゃないのか、と思いました。私はその目から逃げていたのです。けれど今は自分の中でその目と戦い、中学校生活で最後の舞台を成功させたいです。

※

初めは、劇に出る者だけのものであった。練習を重ねていくうちに、ずっと一緒に劇を見守る

者、舞台の絵をつくる作業を熱心にする者がでてきた。一つのもを一緒になって仕上げている喜びを感じとっているようだった。しかしJ男、K子、L子の3人は相変わらず、後ろ後ろに回る感じで、どう捉えているのか分からなかった。

文化祭を終え、自分にとってこの劇はどうだったかについて話し合ったとき、劇に出た者の発表がある中で、それまでずっと沈黙を続けていたK子が初めて挙手した。あふれそうになる涙を必死でこらえているのが分かった。「ずっと劇の練習をしているのを横で見えてきた。……私は……」と一言一言話すK子を見て、この劇に取り組んで本当によかったと想った。そう想ったのは私一人ではなかったと信じたい。

まだまだこのK子にしても、これから戦っていかなければならない壁があるに違いない。まだ立ち上がれないで、もがいているL子やJ男が一日でも早く想いを語れるようにすることが今の私の一番の願いである。

クラスの中の一人が学校に来られないでいる。このこともクラスのみんなにとって大きな壁になっている。

みんなよりよく生きたいという願いがある。これを信じて繰り返し繰り返し想いを語り合い、仲間としての絆を深めていきたい。

「私の目を見て！」は、中学卒業後、行く末を案じる父母の元を離れ、織物工場に就職した主人公が、初めは差別に負けそうになるが、勇気を持って毅然と自分の出身地を告げ、差別に立ち向かおうとする姿が描かれている。

差別に負けそうになる主人公を、ただ弱いと捉えるのではなく、出身地を言うことのできない状況があり、隠さなくてはならなかったという重い部落差別の現実をつかませたい。

想いを語れない状況をつくっているのは、周りが心を閉ざしているからであり、何もしないことは、差別であるということに気付かせたい。また、できれば触れたくない、そっとしておいてほしい、という気持ちの中には、自分のふるさとや、両親を、また自分自身を差別する心があることに気付かせたい。差別を見抜く力を持ち、勇気を持ってしっかりと間違いを正していく力をつけさせたいと思う。

数カ月後には同じような場面に遭遇するかもしれない生徒たちに、主人公のようにたとえ一人になっても、うつむくことなく顔をちゃんとあげて、真実を見つめて生きていく強さを持つてほしい。

真実の道を通こうとする主人公の生き方に共感し、人間として価値のある生き方を選択できる力を持ち、差別解消に向けて積極的に取り組む態度を育てたいと願い本主題を設定した。

### 3. ね ら い

勇気を持って真実を貫き通そうとした主人公の前向きで力強い生き方に学び、自分達の生活を見つめなおし、自ら差別解消に向かう意欲を養う。

### 4. 指導計画

#### (1) これまでの学習

- ・ 道徳 「峠」(真壁仁)……………2時間
- ・ 道徳 「母の願い」(全同教福岡大会)……………2時間
- ・ 第1回全体学習 「母の願い」(全同教福岡大会)……………2時間

- ・ 道徳 「自分以下を求める心」(佐藤文彦) …… 2時間
- ・ 第2回全体学習 「自分以下を求める心」(佐藤文彦) …… 2時間
- ・ 道徳 「意識の芽ばえ」(丸岡忠雄) …… 2時間
- ・ 第3回全体学習 「意識の芽ばえ」(丸岡忠雄) …… 2時間

(2)本時の学習

- ・ 道徳 「私の目をみて！」(土方鉄) …… 2時間
- ・ 第4回全体学習 「私の目をみて！」(土方鉄) …… 2時間(本時1/2)

(3)これからの学習

- ・ 道徳 「ゴンタこそがたたかいを」(音野修平) …… 2時間

5. 本時の指導

(1)目 標

勝子の真実を貫こうとした生き方に共感させるとともに、勝子の前向きで力強い生き方を学び、自分達の生活を見つめ直し、自ら差別解消に向かう意欲を養う。

(2)視 点 真実と正義

(3)展 開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. 今までの「私の目をみて！」の学習を通して、何を感じ、何を学んだかについて話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 勝子が弱いのではなく、出身地を語らせない状況がまわりにあることをつかむ。</li> <li>・ 出身地を隠さなくてはならない部落差別の重みをつかむ。</li> <li>・ 勝子に出身地を言わせたものは何だったかについて考える。</li> <li>・ 差別する心の醜さを捉えるとともに、勇気ある勝子の姿から、差別に負けずに真実を貫く生き方が、本当に人間らしい生き方であることを学ぶ。</li> </ul>
<p>2. この資料を学習して、自分はこれからどう生きていくのかについて話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 真実の道を見極め、それを貫く力強さをもち、差別解消に向けて取り組む意欲を個々の中に確立させる。</li> </ul>

【資料】

私の目をみて！

駅から、バスにゆられていくと、やがて、たんぼのなかに、美しい工場の棟のたちならんでるのが、目のなかいっぱいにとびこんできました。

〈あすこで、今日から、勝子の新しい生活がはじまるのや！あの工場の門のなかに、なにが勝子をまっているのか……〉生れてはじめて、あの川のある部落からはなれ、父母のところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸のなかにも、かすな不安がよぎるのです。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

こんどはクラスのなかまはいないし、勝子はひとりぼっちです。

今朝、家をでるとき、母は、着がえなどをいれたボストンバックをもって、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、だまったままでしきいをまたぐ勝子の顔を見つめていたのです。あのときのあの父の顔が、勝子の目にうかんできます。市電に勝子がのりこむとき、ボストンバックを手わたしてくれながら、

「勝子。気嫌ようして、みんなにかわいがってもらおうのやで……」

とってくれた、あのときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心のなかで、（かあちゃん、おおきに。勝子はがんばるでエ……つよく生きぬくでエ！）と誓っていたのです。

勝子といっしょに、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、50人近くもいました。「新しく入社したみなさんに、全工場あげて期待しています」という、工場長さんの訓話をきいたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮は、廊下をまんなかにして、両側にアパートのように部屋が並んでいる2階建ての木造でした。一つの部屋に6人です。新入社員のものが、一人づつはいることになったのです。寮母さんから、「今度入社された勝子さんです。みなさん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子のはいった部屋には、もう30ぐらいの人が一人いて、あとの4人は、勝子より2つ3つ年かさの人たちでした。

部屋の人たちは、みな親切でした。押入のあいたところを、使うようにとってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「わからないことや、困ったことがあれば、いつでもいって下さいね。こうして一つ部屋でくらすことになったのですから、お互い助けあっていきましょうね。」

いちばん年かさの春江さんがいってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、あとの人たちは、鳥取と香川の人が2人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって……」

「はい。関西ゆうてもひろいでしょう。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行にいっただけ。X市のどのへん」

陽子という香川の人が、はしゃいでたずねました。

「名所の多い……そんな街のなかとちがうの……もうはずれの……つまらんとこです」

どうして私は、あの川のある部落の地名をいわないのだろう。みんな遠くはなれた県の人たちだもの、わかるわけがないのに……。山嵐先生おくるやろな。学校では、あれだけえらそうにいつてきた私が、こうして、つい部落のことをかくそうとしてるんだもの。勝子、平気でいえばいいじゃないの……。という勝子自身の声が、勝子をしかりつけている……。

しかし勝子はついにそのことをいいだせなかったのです。

やがて、1ヶ月の養成期間が終わりました。養成期間の間は、機械のつかい方の講義や、実習などがありました。はじめて工場へは行って、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工員さんから説明されても、なにをいつているのか、ぜんぜん聞えないのです。糸を巻いたコマがくるくるまわり、機械がガチャンガチャンとあがりさがりするにつれて、真白な布地がのびていくのです。

「さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！」勝子の胸には闘志がわいてきました。

作業もだいぶ覚えられて、職場の人とも仲よしになってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へいくと、いっしょに入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。

「おはよう」をいいかわしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさんいてんのやって……」

と話しかけてきました。勝子の、いきおいよくうごいていたハブラシの手がびたりととまってしまいました。とうとうきたのだ。私が、人間として値打のあるものであるかどうか、ためされるときがきたのだ……。つめたいものが背すじを流れていきます。

「なに？ 部落って……」

勝子は、いっしょうけんめい、たかぶってくる感情をおさえながらいました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下のものやがな」

「ふうん。まだ平民ってあったのか……」

「よういでしょう。部落って……まさか、あんたじゃないやろね」

勝子は、なんとかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「……」

「まさか、あんた……」

「もし……、もし、私がそうやったら、どうするの」

勝子は決心しました。かくすことはないのです。恥ずかしがることはないのです。

「そんなことないでしょう」

「そうやったらどうするの」

勝子の声は荒くなってきます。感情のたかぶりをおさえようとしても、おさえきれないのです。

「そんなことない。そんなことないわ……。でも、もしそうだとしたら、ただの友人なら、なんともないけど……。それ以上はかなんわ」

「それ以上ってなんのこと」

「たとえば異性の人やったら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、こわいもの……」

「どうして、こわいの……」

「みんなが、そういつているもの……」

「それは、愛子ちゃんの先入観とちがうか……。 ( いうのだ、はっきりいうのだ ) それ証拠に、この私がこわい」

「……」

愛子の顔色が、かわってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「いままで、私とつきあって、こわいと思ったことあった」

「ううん……」

「部落というのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この4つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上みてくらすな下みてくらせ、部落のこと思ったら、おまえらはましだといって、支配しやすいように、こさえたものよ。その人たちの子孫をいまだに差別しているのよ。それはまちがっているのよ」

勝子は、だんだんおちついてきて、中学校でならったことをしゃべりつづけました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょう」

愛子は、うつむきながらいいました。

「あなた、いま異性なら考えなおすっていったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど……あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目をみて」

勝子の目には涙がたまってきました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたっておちました。愛子は、ちらと勝子の眼をみあげましたが、すぐ目をふせてしまいました。

「私、あなたにいいたいの、あなたは部落のことをなんにも知らずに、差別してるんだわ。私、いままでも、別にかくしてたんじゃないのよ。いいだすチャンスがなかっただけ……。私、きつと、あなたにわかってもらうわ。根くらべしてでも、わかってもらうわ。あなたが、まちがっているってこと……。今日はこれだけにしとく、ハイキングにおくれるから……。さあ、愛子ちゃんもいそがなくっちゃ」

そうはいったものの、こんな工場のなかで、どうたたかっていけばいいのか、勝子にはわかりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、2階にいる雅子さんが、陽子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんが、そうやって……」などと情報を告げて、わいわいといったります。それを聞くにつけても、もうじつとしておれませぬ。1700人の従業員全体に対してどうたたかったらいいのでしょうか。

(被差別部落のたたかい・新泉社・土方 鉄)

1993年9月30日(木)第5校時

3年C組 授業者 山口 智恵子

T<sub>1</sub>: それじゃあ、こちら注目してください。今からC組の公開授業、それに引き続いて3年生全体での全体授業ということになります。1学期、A組とD組とF組がやってきた。その思いを受けて、今回、取り組んだ「私の目を見て」によせるみんなの思いが深まっていく時間になったらと思います。本当にこう、自分としてこの問題が何か、この学習がどんな意味があるんか、そういったことをしっかりと語って行ってください。C組のみんなは石原先生の話聞いたんですけど石原先生は今日、仕事の関係でおいでしてくれてません。みんなにぜひとも頑張るようになって言って先ほど電話をいただきました。先生が語られた思い、みんなと取り組んだ思いっていうのをね、この1時間、本当におもいきり頑張ってください。じゃあ、山口先生、お願いします。

T<sub>2</sub>: 学習を始める前に、ちょっとみんなに見てもらいたいものがあります。じゃ、二人、お願いします。前に出てきてくれるかな。

RI(女) あっ、愛子ちゃんおはよう。

KT(女) おはよう。

RI(女) いい天気になってよかったなあ。

KT(女) うん、いいハイキング日よりやね。

RI(女) おやついっぱい買ったんよ。一緒に食べような。

KT(女) うん、一緒にいようね。

KT(女) あのね、勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさん居てんのやて。

RI(女) 何、部落って。

KT(女) 勝子ちゃん知らんの。

RI(女) うん。

KT(女) 平民の下のものやがな。

RI(女) ふうん、まだ平民ってあったんか。

KT(女) よう言うでしょ。部落って。

KT(女) まさか、勝子ちゃん。あんたじゃないやろうね。まさか、勝子ちゃん。

RI(女) もし、もし私がそうだったらどうするん。

KT(女) そんなこと無いでしょう。

RI(女) そうだったら、どうするん。

KT(女) そんなことは無い。そんなこと無いわ。

RI(女) でも、でも、もしそうだとしたら。

KT(女) ただの友だちだったら何ともないけど、それ以上はかなわんわ。

RI(女) それ以上ってどういうこと。

KT(女) 例えば、例えば、男の人やったら、異性の人やったら、考え直すわ。

RI(女) どうして、

KT(女) どうしてって、怖いもの。



RI(女) どうして恐いん。

KT(女) どうしてって、そんなん言われても。みんなそう言ってるもの。

RI(女) それは、愛子ちゃんの先入観とちがうん。それが、それが証拠に私が恐い。今まで私とつき合ってたて恐いと思ったことある。

KT(女) ううん。

RI(女) 部落というんはね。徳川の時代にあつた士農工商という身分制度なんよ。この4つの身分よりまだ下とされてたんよ。幕府が百姓、町人を牛のように働かせるために「上見て暮らすな、下見て暮らせ。」部落のことを思ったらお前やまだましやって、支配しやすいようにこしらえたもんなんよ。その人たちの子孫を末だに差別しとんよ。それは、まちごうとるわ。

KT(女) でも、勝子ちゃん、今の時代に差別は無いでしょう。

RI(女) 愛子ちゃん、今、あなたが異性なら考えなおすって言ったでしょう。それが差別の証拠よ。

KT(女) そんな、けど、勝子ちゃん、そんな所の人って信じられへんわ。

RI(女) じゃあ、じゃあ、私の目を見て、私、愛子ちゃんに言いたい。あなたは部落のことを何にも知らんと差別しとんよ。私、今までも別に隠してきたんとちがう。言い出すチャンスが無かっただけ。私きつとあなたに分かってもらう。根比べしてでも分かってもらう。あなたがまちがっていることを。

今日はこれだけにしとく。ハイキング遅れるから、さあ、愛子ちゃんも急ごう。

T<sub>3</sub>: はい、ありがとう。今、二人が演じてくれたところは「私の目を見て」の後半の部分です。3Cは文化祭で劇、人権劇で「私の目を見て」という劇に取り組みました。それから、ずっと「私の目を見て」を学習してきて、あなたたちがはっとするようなこと、胸にずきんとくるようなこと、それから、心に残っているようなこと、そういうふうなものがあると思います。それから、発表していきましょう。

MM(女) 私はこの勝子ちゃんがどうしてこんなに強く生きられるんだろうと思いました。愛子ちゃんや1700人もの人を相手に闘っていくっていう決意をもった勝子ちゃんを、私はすごく尊敬します。でも、今の私だったら勝子ちゃんみたいには闘っていけないように思いました。

T<sub>4</sub>: はい、続けていこう。どの部分からでも自分が心に残っている、はっとしたようなこと。

YA(女) 私はこの資料を読んだ時に一番心に残ったのは、「勝子ちゃん今の時代にもう差別は無いでしょ。」という言葉でした。それは、わたしもそうかも知れないけど、この中にもやっぱり自分が差別しているのを知らずに差別して、やっぱり、傷つけてしまっているというか、そういうことがないとはかぎらないと思います。

T<sub>5</sub>: はい、私はどう思いますか。何からでもいい。話し合いのきっかけになる。

SK(男) ぼくはこの資料で、勝子さんが愛子さんに自分の全てをさげ出して、すごいなと思いました。

YN(男) 勝子ちゃんは、この資料の中でも中学校の時のこととか、やまあらし先生のこととかいっぱいできていて、この社会に出ていって、勝子ちゃんすごいおつきいなって、すごい勇気とかあるから、中学校の時にいろいろ勉強して、勝子ちゃんのようになりたいです。

DA(男) ぼくが印象的に残ったのは、「1700人の従業員全体に対してどう闘っていけばいいのでしょうか。」という部分で、この前ぼくたちが行っている学習会で、南会場と川端会場のみんなと、それから、郡頭会場のみんなで集まって話し合ったんです。その時に卒業生の〇先輩が来てくれていました。〇先輩のいつている学校には、〇先輩のクラスには〇先輩しか部落の

人間はいないんです。で、ぼくがぱっと思ったのは、この状況と一緒にだと思いました。○先輩はそれでもみんなに分かってもらうって言って、向こうで頑張っているんです。ぼくも一緒に学習会出身でしょう。ぼくが高校行けるかどうか分かりませんが、高校に行ってみんながいるかどうか分かりませんが、○先輩や資料の勝子さんみたいに、どれだけ自分がその場で試されるかというような、そういう感じです。

SA(女)私は勝子さんの生き方を見て、私の今まであたりまえだと思ってきたまちがいに気づきました。

T<sub>9</sub>：うん、あたりまえだと思っていたところ、ちょっと、詳しく言って。

SA(女)私も小さいころ、恐いとかそういうふうに言われていたから、そう思っていて、自分のなかですっとそう思っていました。それでも、この勝子さんと愛子さんの話のところで、自分はずっとまちがえていたんだなあと思いました。

TO(女)勝子さんのように、大勢のまちがった考えの中でも自分の意見が言える強い意志を持たなければいけないなあと思いました。

T<sub>7</sub>：何人かの人、今、「私の目を見て」の学習を通して意見を言ってくれました。どんなふうを受けとめたかを言ってくれました。その意見に対してでもいいです。それから、この資料についてでもいいです。もうちょっと思い、聞かせてくれるかな。

AK(女)勝子さんが私の目を見てって言って、涙を流しながら言ったところがあったんだけど、その時一生懸命、涙流しながらも言ったとき、私に伝わってきたのは、勝子さんは一生命がけでも、部落差別に対してまちがった考えを持っている人に、それはまちがっているよって言って、分かってもらうように、一生闘うつもりなんだなって、私には伝わってきました。

T<sub>8</sub>：はい、伝わってくるものにどんなものがあつたですか。

YO(女)私はこの劇を文化祭でやるようになったとき、やりたくないなあと思いました。勝子さんをこんな思いにさせたのも、私たちみたいな、私みたいにこんなことを思った人が苦しめていたんだと分かりました。

MM(女)私はこの資料もらって、この劇をするって言われたときに顔では笑っていたけど内心は嫌でした。人権部の方で人権劇をして、学級の方でも人権劇、なぜしなければならないのかって思っていました。それで、練習をしてみんなが文句言うのを聞いていて、なぜそんなことを言うんだろうって思って、自分の心の中が複雑になってきました。自分の本当の考えが何かっていうのが分かりませんでした。練習していてもみんなの文句聞いていると、ほんとうにこのままの状態でもいいんだろうかって気持ちありました。その時に言い返せなかった自分がすごく悔しかったです。

T<sub>10</sub>：言い返せなかった。どんなことを、

MM(女)みんなが嫌って言っている時に、半分ぐらいはしてもいいんじゃないかっていう気持ちになっていたんです。だから、してもいいんじゃないって言えたら良かったんですが、自分にそれを言う力が無かったから言い出せなかったんです。

T<sub>10</sub>：はい、劇への思いを今言ってくれましたけど、どうですか。他の人はどんなこと考えた。

SM(男)ぼくも正直言って、初め劇やるって言われた時は嫌でした。なぜか、やっぱり人権問題から逃げていたんだと思います。

T<sub>11</sub>：他の人はどうでしたか。

MF(女)私も初めは、人権劇するっていうのはほんとうは嫌だったっていうか、最後だから楽しい

のがしたかったけど、劇をしてすごい、いろんなこととかたくさん学んだので劇をしてすごい良かったと思います。

T<sub>12</sub>: うん、MFちゃん、ちょっと学んだこと、どんなこと学んだかな。

MF(女)例えば、人権劇が嫌っていうことは、やっぱり差別してるっていうか、差別しているのと同じっていうか、そんなこと。

RI(女)私も最初は人権についての劇をするのが嫌でしたくなかったんだけど、練習していくうちに、したくないって思っていたのは、差別を他人ごとに考えていたからだなあと思いました。



SK(男)ぼくも文化祭の劇は嫌で、練習はさぼってばかりいたけど、みんなのやっているのを見て、ぼくもしなければだめだなあって思い始めて、文化祭に参加することができました。

T<sub>13</sub>: もうちょっと、思いを聞きたいな。他の人の思いも。劇に出た人、出なかった人、関係ないね。

YF(男)ぼくも最初せりふを笑いながら言ったりしてたけど、他のみんなを見ていてすごく自分が情けなくなってきた、最後の最後だからやっぱりみんなに見てもらいたいし、真剣にやりたかったから、きちんと最後はやってみんなに見てもらえました。

YN(男)文化祭で劇に出たのは、男子ではぼくとYD君とYFちゃんだけでした。最初は先生が劇に入る人はダンスに出なくていいとか言っているのを聞いて、じゃ、こっちがいいなあとと思ってしたんだけど、やっぱりYFちゃんとかも最初は笑いながらしたけどだんだん本気になってきて、女子とかも真剣になってきて、ぼくたちも本気でしなければいけないなあと感じてきました。やっぱりこの劇は部落問題だけでなしに、石原先生も言ってたように、人間として勝子さんの生き方すごいし、そんなものが伝わってきて、ぼくもこの劇してよかったなあと思いました。

SA(男)ぼくも最初はこの資料もらった時、なんかものすごく嫌でした。先生勝手に決めたりして、腹立つなあとか思って、文句ばかり言っていました。でも、なんかみんな一生懸命練習しているのを見ていたら、そういうふうにするのも悪いなと思うし、最初は休もうかなとか思ったんだけど、なんかそんなんで休んだら、なんか逃げたみたいで嫌やだから、ぼくもやってみようかなって思って、なんと言っていていいかわかりませんが・・・。

YN(男)この劇の後ろの押入とかの大道具を造るときに、SAとかSKとかDAちゃんとか手伝ってくれました。劇自体もよかったけれど、やっぱり、かげでああいうのを作ってくれて、すごい教えてくれたなあと思います。

T<sub>14</sub>: うん、そうだね。思い出しますか。劇に出てなかったから、私分らないとかいうのはないでしょう。どうでしょう。

AK(女)私は人権劇やるって親に言った時、最後ぐらい、なぜお笑いのあるやつしないんだって言われたけど、最後だからやるんよって言いました。そうしたら「ふうん。」って言われたけど、

それ言われた時に、何でそんなこと言われてまで人権劇しなければならんだってちょっと思いました。でもやっぱりみんなが一生懸命しているのを見たりして、何もせりふがない役でも並ぶだけでもやるのに意味があるなあとと思って、やろうと思いました。あの資料が配られた時は私も、最初嫌だなあとか思っていました。でも、先生がこの劇のシナリオを配っている時に、みんなが嫌だなあとか言っているのが聞こえていたはずなのに、先生、何も言わずに配っていたから、やっぱり、後に残るものが分かっていたから、先生はこの資料を、この人権劇をしたんだなあと思いました。

MJ(女)私もこの劇をするのはすごく嫌だったんだけど、この間の話し合いで、先生がこの資料配ったとき、どんな気持ちだったかということで、振り返ってみたら、その嫌っていうのが、自分の差別意識に気づいて、私は差別しないって思っていたんだけど、差別している自分に、これではいけないなあと思いました。それから、この劇をしてその差別意識に気づけて、とてもこの劇をして良かったと思います。

TO(女)私も人権劇するのはすごい嫌で、最後だから笑いとれるのをしたいって思いました。でも今は、最後だから人権劇できて良かったと思います。

MM(女)私はこの劇で春江さんの役をやったとき、何も思わずに春江さんの役をしていたけど、先生がある日、春江さんってどういう気持ちなんだろうなあって言われた時に、家へ帰って考えたら、春江さんは勝子の不安は分からんと思うけどそれを支えていける寮の同じ部屋に暮らしている人だってそのとき思いました。春江さんは多分これから勝子を支えていける唯一の人だって思いはじめて、この劇やって良かったって思いました。それで、この勝子さんの気持ちとかも自分なりに分かってきたように思うし、なんだかこの劇、嫌って思っていたけど、あとですごく嬉しい気持ちになりました。

MT(女)私もこの劇やるときに、決まる前まではお笑いとかしたかったんだけど、劇をやっているって何ていうのかな、舞台上で立っているだけでもみんな真剣だった。なんだか自分も嬉しいなって、やってみようかっていう気持ちになった。今もすごい緊張していて、劇のときもすごい緊張していたから、なんだかこう自分の意見がここで言えるのがすごい嬉しい。

YF(男)最初みんな、劇に対してはめちゃくちゃだったけれど、最後になったら心が一つになって劇に対して、みんな真剣になって取り組めたから、それだけでもこの劇をやった意味があったと思いました。

YA(女)私もみんなと一緒に、文化祭の時にとにかく出たなくなつて、それでちょっとだけ役が決まった時に、もうすごい嫌で文化祭の時に休みたいとか思ったほどでした。でも、やっぱり、YF君がさっき言ったみたいに、なんかみんな一生懸命になってきたし、それで、男子とかも、あの後ろのダンスとか造るのを手伝ってくれて、それで、今になったらみんなも思っているように、ほんとうに人権劇やって良かったと思いました。

SK(男)：ええと、さっき、DA君が発表したことで思ったんだけど、ぼくがもし高校にいったときも周りの子が部落問題に関心の無い子だったら、ぼくが闘っていかなければいけないかもしれないので、ぼくは今のうちに勉強していきたいと思います。

T<sub>15</sub>：うん、それが今この場だね。

MM(女)私もこれまでの理想の高校っていうのは、現実の高校と全然ちがうかって、一回クラブの時間に人権部で高校での話を聞きに行ったんですよ。そうしたら、現実にはみんなそんなのに関心なくって、一生懸命言ってくれている人がいるのに、本読んだり笑ったりじゃんけん

したりして遊んだりしてりする人がたくさんいました。現実と理想とちがうっていうのが分かって、そのときは高校ってあんまり行きたくないなって思ったんですけど、そういうところに出て自分の力試して、そういう人無くしていかなければいけないって後から思いました。一生懸命勉強して、高校行って無くしてやろうって気持ちに今なっています。

T<sub>16</sub>：今の気持ちがよく伝わってきます。はい、

DA(男)：今のSKの言ってくれたことで、ほんとうに社会行ったら誰もいません。まえに、森口先生もそんな話言ってくれました。社会行ったらほんとうに一人で、さっきのO先輩の話で、高校に行って自分が部落だって、O先輩、言ったんです。言った時には周りに3人ぐらいいて、その3人が「部落のやつが頑張らなければ、そんなの無くなるか。」って言ったんです。すごいそれ聞いて腹立って、「お前たちはなにをしているんだ。」ってその場でいたら言っただけです。部落の者だけが頑張るって無くなるはずがないって、その時思いました。周りの人間がなんにもしなくてただ見ているだけで絶対に無くなるはずがないって、その時ぼくは怒りがこみあげてきました。

T<sub>17</sub>：はい、みんなはDAの意見どういうふうにとめるんですか。

YN(男)今の中学校で発表とかしていて、今の3年生だったら友だちが支えてくれるから絶対に後についてくれるとか思って、発表できるけど、やっぱり高校とか社会とかに出ていって一人になった時に、もし一人になった時に、自分だけになったらどうするかっていうのを考えて、やっぱりDAちゃんが言るように自分で闘っていかなければいけないと思います。



YF(男)：ぼくもやっぱり、DAちゃんとかYN君が言うた通りに、部落の者だけが闘っていても、やっぱり差別は無くならないし、やっぱり、部落で無い者もみんな部落の子のことを考えたりしてみたらすごく辛いと思います。だから、ぼくたちもやっぱり一緒になって考えていって、これからも差別に立ち向かっていかなければならないと思います。

T<sub>18</sub>：みんなが後数カ月後、板中のみんなから離れて、周りが自分のいつもいた友だちと変わってくるわけです。ちがう環境に入っていくって、一人、闘えるか。どうですか。今、こうやってね、学習していることがね、半年後、力になって出てくるんだろうか。今、みんなのやっていることが本当の力になっていますか。私は時々不安になる時があります。ほんとに、こういうことがみんなの力になっていってるんだろうか。勝子さんのように、3Cを離れて、板中を卒業して出ていった時に、中学校で習ったことをしゃべり続けられるような力をつけていってるんだろうか。どうですか。私のやっていること、3Cの取り組んでいること、本当に一人ひとりの力になっていってるかなあ。どう思いますか。

DA(男)ぼくはこの学習、遊びでやってないです。森口先生も命がけでこの学習やっています。社会に出て黙って過ごすぐらいなら、この学習をやらん方がいいと今思います。ここ出てから、

自分が胸張って、ぼくは部落だって言っただけで、部落って聞いた周りの人が、何年かつき合ってきた友だちが離れていくんだしたら、意地でも捕まえます。

T<sub>19</sub>: DA君の思いどう受けとめるんですか。3Cの仲間として、はい。

SK(男)やっぱり、こういう話し合いや、勉強できるのは中学校で最後と思うので、今、勉強していかなければ、発表していかなければ、高校で頑張っていけないような気がします。

AK(女)今、DA君が言ってたんだけど、ある程度つき合ってきて、それで自分が部落って言ったとします。それで周りの子がどんどん離れていくとしたら、それはほんとうの友だちでないとと思うんです。ある程度つき合ってから、私は友だちと思っても、それから何って言うか部落だって言った瞬間からくずれるようだったら、ほんとうの友だちとちがうと思うんです。今、この小さいんだけど、3Cっていう社会の中で、みんな発表一人ずつ、一人ずつでもできていってるから、発表して自分を少しでも変えられるようになった子は仕事を始めても、高校行ってもやっぱりみんなの気持ちは変わらないと思います。

YA(女)勝子さんは中学校のときに部落問題に真剣に取り組んでみたいんだけど、その勝子さんでさえも自分が部落出身っていうのを、愛子に言うのをためらったってことがありました。それが私だったら、高校に出たときに、今だったら自分が部落出身だったら、そう言えるかもしれないけど、でも、高校に行ったときにそう言えるかって言ったら、前は言えると思ったんだけど、でも、この高校のみんなが関心がないっていうか、さつきDA君も言ってたけど、そういう中だったら言えないかもしれないと思いました。

T<sub>20</sub>: 何で言えなくなるんだらうか。何で言えなくなるだろうと思う。

YN(男)今、先生が何で言えないんだらうっていうのを聞いて考えていたんだけど、やっぱり、発表するのとかでも、周りの雰囲気とかが悪かったらなかなか手が重くて、こんなときなかなか挙げられないと思う。だから、学校自体の雰囲気っていうか、一人だったら変えられないかもしれないけれど、勝子さんのように「根比べしてでも」っていうくらいで闘っていかなければならぬと思います。

T<sub>21</sub>: 横にいる友だちを一人ずつ変えていく。勝子さんのようにね、1対1700人、なかなか変えていくことができない。でも、隣にいる一人を変えていくんだらうどうですか、みんな、どうですか。

MM(女)私は隣におるSIちゃんとかを変えていけると思います。こうやって私が言っていたら、たぶんSIちゃんやSAも言おうかなあと思ってくれると思うから、それを辛いと思うけど、手を挙げて言ってくれると私は信じているから、隣にいる子を変えていけると思います。

T<sub>22</sub>: どういうふうにして変えていく? みんな、変えていけるだけの力を持っていますか。今、3Cのクラスを変えていく力を持っていますか。みんなが卒業していったらね、ばらばらになるね。3Cのみんなばらばらになる。後、数カ月でばらばらになるんです。いろんな方向にいったら高校いく子も、就職する子もばらばらになる。ほんとに自分の生き方っていうか、自分のね行動の仕方を問われるとき、自分の生き方を問われる時にね、3Cのみんなの声が、隣にいった子の声が聞こえてくるだろうか。それと、私は、山口的の声が聞こえてくるだろうかかって思います。勝子さんはね、やまあらし先生の声が聞こえてきた。一緒に闘ってきたみんなの声が聞こえてきたんだと思うなあ。そんなふうにはばらばらになったときにね、3Cのみんなの声が聞こえてくるだろうか。山口的の声が聞こえてくるだろうか。そのためにもね、3Cのきずなをね、本当に強いものにしたいと思う。本物にしたいと思う。上辺だけでない、

本物にしたいと思う。どうですか。みんな。そうは思いませんか。

YA(女)私もそう思うけど、今はまだそうならないっていうか、本物になってないと思います。それで、隣の子を変えるっていうか、それも私にはまだできないと思うけど、まず、自分から変わっていかなければならないと思います。まだ、部落出身って言える自信はないけど、でも、それが言えると思えるようになったら隣の子も変えていけると思います。

SI(女)：私はクラスの中でもなかなか意見の言えないほうです。夏休みをはさんで一学期の思いとかもなんか忘れてしまって、それで、なんだか自分には関係ないみたいになってしまって人ごとに考えているように思いました。けれど、MMさんとか信じてくれているのに、なんだか言わなければ差別していることになるし、今までみんなに自分を変えてもらっているばかりだったけど、これからは誰かを変えていけるようにしたいし、3Cのきずなの中に入れるようにしたいと思います。

AN(女)私が1学期の意見発表会の時に、お母さんにすごく反対されてもうあきらめかけていた時に、みんなが話し合いをしてくれて、その時にいろんな子が励ましの言葉をかけてくれて、たった一言でも、すごくそのときに自信がついたし、私はあの時、意見発表会に出ようと思わせてくれたのは3Cのみんなだったから、やっぱり、みんなを変えていきたいです。

YN(男)さっき、ぼくが発表したことで、周りを変えていきたいって言ったんだけど、自分でどう変えていかなければならないか、今考えていて、やっぱり周りを変えていくということは自分自身もどんどん変えていかなければできないと思います。

SA(女)私も周りの人を変えていけるようにするんだったら、自分自身も、思っていることをみんなの前で言うっていうことが、今までできていません。それを、自分でもこれから変えていこうと思います。周りの人も私のことを支えてくれていると思うから、私もみんなのことを支えていこうと思います。

AA(女)私は、隣の子を変えるんじゃないかって、まず、自分を変えないといけないと思います。

AK(女)私は、なにに関してもみんながやっているからやるとか、そういうの、ずっと思ってきてたけど、こういう学習の意見発表とかに関しては、それはもう無くなりました。前まではあの子が発表しているから、私もしなければいけないのなあ思ってやってたけど、今は全然そんなこと思わずに、もう何も考えず自分は黙っておれないみたいな感じで手が挙がっていきます。周りの子とかも、一人が悩んでいたら、私とかみんなついていってあげられると思うから、みんな一人ひとりがくじけそうになったときとか、悩んでいる時は私も頑張って支えてあげようと思うから、私がかくじけそうになった時はお願いします。

T<sub>23</sub>：みんなは、今、みんなここで言うっておかなければいけないことないですか。一人ひとりの力ってね、すごく弱いと思う。でもね、つながっていくことでね、3Cが固まることでね、また、一人ひとりを変えていくことができるんだね。一人の力弱いけど、すごいもの持っているね。つながる事できずなを深めていく、どんどんこれからもね、きずなを深めていきたいんだけど、そのきずなの中に自分が入るぞって、そう思う人、今ここで気持ちを聞かせてくれると、また誰か一人を変えていく力になると思う。どうですか。

HU(男)ぼくはクラスでのこういうふうな話し合いをする時は、真面目にやる時とやらなかった時があって、やらなかった時はなんか寝てしまったりしてました。そういう時はなんにも緊張もせずにいられるけど、やっぱり発表しようと思ったらものすごい緊張します。やっぱりこれから、そういう自分を無くして行って、発表していかなければいけないと思います。

TK(男)ぼくもなかなか発表できなかったけど、これから、苦しんでいく人たちを思ったら、もっと発表していきたいと思います。

YI(男)みんなが発表してるのに、ずっと座っているのはいけないと思って、今、言いました。

TA(男)今までは一回も発表したことなかったけど、これからは自分を変えていくためにも発表していきたいです。

MJ(女)私には、まだ、みんなを変えたり自分を変えたりする力は小さいと思うけど、これからは、みんなとかに思いを伝えあつてクラスのきずなを深めていったら、変えることができるようになると思うので、思いをきちんと伝えることができるようにしようと思います。

MN(女)今の私には、まだ周りの人を変えられる力はないけど、自分を変えていきたいと思います。

SA(男)今の自分に隣の人を変えられるかって聞いたら、できないと思うけど、これから、自分の思っていることを堂々と胸張って言えるようになって、隣の人を変えていけるような人間になりたいです。

KH(男)今は全然人の力になるようなことはしていないけど、部落問題とか考えているうちにしていきたいと思う。

YN(男)今日、みんな発表してくれてものすごく嬉しかった。男子とかもみんな発表してくれていたから、これからは、今日発表してくれていた人とかと一緒に、今日で全体学習が3Cでは終わりなんだけど、全体学習なんかなくてもやっぱりみんなと一緒に、3Cの、一つの3Cとして頑張っていきたいです。



MF(女)私も3Cがばらばらに分かれても大丈夫なような、そんな自分をつくっていきたいと思います。

KT(女)みんな、今まで発表してきて、きっと支えになった子とかいると思う。けど、私はまだみんなに支えられたりしているほうで、まだ、支えるっていう方までいけないかもしれない。今日の授業とかで自分が変われるように、自分の意見が言えたら悔いもないし、自分もきっと変わる。そのうちみんな離れてしまうんだし、高校いっても新しい友だちにこんな授業したよとか、やっぱり、差別とかそんなのいけないって、ちゃんとと言えるように、これからも授業で頑張っていきたい。

AT(女)知らんぶりするんって、ものすごく卑怯なことだつて今思ったから、振り向かしてくれる人に早く、面と向かって吠えられるような感じで差別を訴えていきたくて思いました。

YK(女)いつもみんなの思いを聞くばかりで、自分の意見はなかなか言えないんだけど、これからみんなと頑張っていきたいと思います。

T<sub>24</sub>: 今日の5時間目の授業この一時間で、すごく変わった自分が確かにあったと思います。この思いをつなげていきたい、燃やし続けていきたいと思います。まだまだ、道は険しいものがあるかもしれませんが、でも、3C、学年、横のつながりを信じてね、一緒に考えていきたくて思います。終わります。

1993年9月30日第6校時

3年全体 授業者 阿部 憲作

T : 1学期以来の全体学習ということで、久しぶりに3年生全員が同和問題について語り合う時間がもうけられました。今日まで各学級において「私の目をみて」の資料を学習してきました。そして今、3Cのみんなが一生懸命それぞれの思いを語ってくれました。3Cの仲間がいろんな問いかけをしてくれたと思うんです。周りで見えていた人達もいろんな思いがわきおこってきたと思います。もちろん3Cの人達も言い足りなかったことがたくさんあると思います。今からこの資料が、自分に何を訴えているのか、何を問いかけているのか、あなたがたはこの資料をどう受け止めるのか。そして今、3Cの授業を見て、何を感じ、僕は、私は何ができるんだろうかということについて、どんどん発表してほしいと思います。この授業はみんながつくりまします。先生はできるだけひかえて、一人でも多くの人達が発表してくれることを期待しています。じゃあ、お願いします。

KA(女)勝子さんがあんなに強くなれたのは、中学校のときの仲間と一生懸命部落問題について話し合ってきた、部落差別がどれだけ不合理かが十分わかっているから、あんなに強く愛子さんに言えたのだと思います。勝子さんが言えたのは、やはり勝子さんを支える仲間との強い絆があって、それがあから言えたのだと思います。そして今、私達がこうやって発表していくのが絆になっていくのだと思います。

AD(男)本当にみんな真剣に取り組んでいるから、自分も仲間に応えて真剣にしていこうと思いました。

KN(女)私もさっきのC組の授業見ていて、私たちのクラスも文化祭で人権劇をしたので、C組も始めは私たちと同じだったんだなあと思いました。私達も始めの方は少しいやだなあと思っていたけど、練習をしているうちに、本番が近づいてくるに連れて、みんな真剣になって、劇らしくなってきました。本番はすごい緊張して、下からライトで照らされてお化けみたいになったんだけど、本当にやってよかったと思うし、最後の文化祭で人権劇をやれて心からよかったと思います。

KJ(女)私は、月曜日に学習会に行っていたんだけど、そのときに、今城ノ内高校に行っている2年生のO先輩が来ていろんな話をしてくれて、その中でさっきA君も言っていたけど、クラスの周りの子が同和問題学習を勉強しているときに、ある子が「部落差別がなくなるのは部落の人が頑張らないから」と言ったということで、ものすごく腹が立ったんだけど、私もA君と同じように部落の人は部落の人なりに頑張っているし、部落差別があること自体がおかしいと思うし、差別の責任を私達部落の人間に責任転嫁しています。だから、ものすごく怒りがこみ上げてきました。

MM(女)私も3Cの授業を見てみんなの熱が伝わってきました。それと、私も月曜日学習会に行っていて、O先輩がいろいろ高校の話してくれたんだけど、「部落の人が頑張らないから差別がなくなるんだ。」って言っている人がいると聞いたときに私も腹が立ちました。部落の人だけが頑張ったって部落差別はなくなるわけがないし、部落外の人だって頑張らなければ、一緒になって頑張らなければ、差別はなくなかないと思いました。

OK(女)今の3年C組の授業を見ていて、私の差別意識も少しは変わったように思います。そして、私も周りの人を変えていきたいです。3Cの授業を見て今の私だったら力が足りないと思う

けど、みんなと一緒に頑張っていきたいです。

NY(女)この資料の中のことなんですけど、「今の時代に差別はないんでしょう。」というところがありますが、私も以前、本当にそういうふうに思っていました。私は小学校のときに部落差別を知ったんですけど、それは本当に昔のことだと思っていました。そして、少なくとも板野町には部落差別はないと思っていました。だけど、中学校に入学して今も全体学習をやっているけれど、もっと自分自身をしっかり見つめていきたいと思うし、がんばらなければいけないなあと思います。

HM(女)私も月曜日に学習会行っていました。A君たちが言ってたけど、O先輩のクラスに、部落出身の人はO先輩だけしかいないらしいです。もし、私が高校に行ったとき、クラスのみんなが部落外の子で、私一人だったらみんなの前で、友だちにも自分が部落出身って言えるかなって思っていたんですけど、今ここで、部落差別について一生懸命勉強して、激しい怒りをもって、高校に行ったり、社会に出たりしたら、周りの友だちを変えていけると思うから頑張りたいです。



KT(男)ぼくはおなじ柔道の仲間として、A君と友だちでいて、A君がここまで差別のことを真剣に考えていたとは知りませんでした。それで、今日、3Cの授業を見ていて、ぼくは本当にA君は輝いていたと思うし、A君と出会えてよかったと思いました。

OK(男)ぼくは、学習会に行っていないから、みんなみたいにいろんな知識はないけど、この「私の目を見て」の資料を読んで、まだぼくたちみたいな年頃の中で、こんな先入観をもった人がたくさんいるのだったら、ぼくたちの力で変えていかなければならないってみんながそう言っているように聞こえるけど、本当に僕たちだけの力で変えられるかどうか不安です。それと、愛子さんが言っていたように、いろんな差別があるけど「異性の人だったら考えなおすわ。」っていうのが、納得いきません。

ST(女)さっきの学習会での話を聞いて、差別をなくすために部落の子だけが一生懸命するのでなく、みんなで一緒になって部落差別をなくしていくように真剣にしていけないと思いました。

OM(女)同和問題学習をしていくうちに、部落差別が身近なものになってきました。他人のこととしか考えていなかった自分が、恥ずかしくなりました。もっと自分を変えていかないかんと思います。

SA(男)さっきの3Cの授業を見て、やっぱり話し合っているものだなあと改めて思いました。それと、僕の親も部落について誤った考え方や偏見をもっています。それについて「違う。」と否定しても「何を言ってるんだ？」って言われて、ものすごく悔しい思いをしました。だから、まず親と闘って親の考えを直していきたいと思います。それに、下を向くのではなく、意見をいっている人の方をしっかりと見て、これからまた頑張って自分の意見を語っていこう

と思います。

MK(女)私はMさんと一緒に板野高校へ講演を聞きに行きました。そのとき、はじめて高校の現状みたいなのを見せられて、そして、体育館内の雰囲気は中学校とすごく違って、なかには寝てる人もいたし、遊んでる人もいたし、先生もそういう人見つけても、ただそばで立っているだけでした。部落解放同盟の方たちがいて、その人が「注意せんのか。」って怒ったとき、はじめて注意していました。そういうのを見ていたら、私も高校とか社会に出て闘っていけるかどうかわからないけど、もっともっと、自分自身が強くなって闘っていけるような自分にしていきたいです。

NA(女)私はこの3Cの全体学習が始まるまで、数日前に3Cの子から、「同和問題学習の時間にあまり手を挙げてくれる子がいない。」とか、「全体学習をするのが不安だ。」とかいうのを聞いていたんだけど、今日の全体学習を見てたらほとんどの子が頑張ってる手を挙げているのを見て、3Cの絆って言うのはすごいなあって思いました。それと、3Cで全体学習しているときに話題になったことですが、「自分が何ができるか」っていうことなんですけど、私はまだ自分が周りの子を変えるようなことはできないし、まだ、周りから支えられているような立場と思うけど、これから高校に行っても絶対負けたくないになりたいと思います。

KS(男)僕は月曜日学習会に行っていて、O先輩の話を聞いてきたんだけど、本当に高校に行ったら、部落でない人達はたくさんいる。たくさんいて何を話しても分かってくれないというか、わかり合えないっていうような感じの話でした。部落の人間が頑張っていかなきゃ友だちができないとか、そういうふうになってしまうらしくて、今板野中学校で頑張っているみんなも、高校行けば実際はどういうふうになるかわからない。だから、今から頑張ってる勇気をつけて、高校で意見がどんどん言えるようになっていきたいと思います。

KN(女)私は以前、学習会の仲間と一緒に、夏休みに高校生の奨学生集会に行ったのですが、そのとき、何十名も参加者がいたのに、ほんの数名しか意見を言っている人がいませんでした。その時、ずっと高校生の頑張り期待していたっていうか、意見を聞きたくてその会に行ったのに、ほとんど意見がでないままで帰ってきて残念でした。その後、今週の月曜日、学習会でO先輩の話とか聞いていて、このままじゃいけないって思ったので、高校に行くまでにそういう話し合いとかの場で、堂々と何でも自分の思っていることが言えるようにならなければいけないと思いました。

EA(男)僕は学習会に行っていないからO先輩のことをよく知らないけど、「部落の人が一生懸命に頑張らなければ、部落差別がなくなる。」とか言っていたけど、部落外の人でも頑張らんと絶対差別はなくなると思いました。

YE(女)今日の3Cの授業を見ていて、すごくよかったと思います。現に隣の人を変えられた人もいるし、みんな一人一人が自分の意見を言っていて、すごいなあと思いました。私は3年になってからあまり発表できていないけど、この調子だとこれからは自分や周りの人を変えていけそうな勇気が湧いてきました。それと、3年C組でKさんが、「もし、自分が落ち込んでいたときとかあったら、みんな助けてください。」とか言ってたけど、クラス外の私も友だちとして遠慮なく相談してほしいと思いました。

OJ(女)私も5時間目の3Cの授業を見て、一人の子が何度も発表したりしてすごいなあって思いました。私自身今日の3Cの授業は、絶対3Cのみんなが頑張ってるいい授業をつくってくれてるって信じていました。3Cのみんなを信じていてよかったなあって思いました。それと今

日の「私の目を見て」の資料は、自分が高校に行ったときに何ができていたということが問われているのだと思います。私は実際高校に行ってみないと何ができてかわからないけれど、この間の学習会で森口先生やO先輩が言っていたように、周り何かがしてくれるのを待っているのではなくて、自分から発表したりして、まず自分が先頭に立って今できることを始めていきたいと思います。高校に行っても頑張っていきたいと思うし、まず、一人でもいから信じてくれる友だちをつくって、私はその信頼できる仲間が一人でもいるかぎり絶対負けたくないと思うから、そんな仲間をつくって、いつかはその一人の仲間と少しずつたくさん仲間にしていきたいと思います。

MK(女)さっきから高校の話が出ているんだけど、話を聞いているとすごく腹がたってきました。でも、私は部落差別を他人ごとのように考えていた部分があるので、自分の心の弱さとこれから闘っていきたいと思います。

KJ(女)私は3Cの授業を見て、意見が絶え間なく続いていてすごくいい授業だったと思います。今のF組は、教室ではなぜか手を挙げられない雰囲気があって、1学期の頃は全体学習があったの



で、それに向けてみんな意見とかたくさん言っていたんだけど、夏休みをはさんで2学期になったら、そういう気持ちもだんだんなくなってきたように思います。今は何か同和問題学習の時間でないような感じになっているから、また1学期のようなF組をとりもどしたいなあと思います。

IT(男)3Cは普段あまり発表しないって聞いていたのですが、今日の授業を見てすごくたくさん発表するし、山口先生が意見があまりでないときは泣いていたっていうのも聞いたことがあるし、今日の3Cの授業見て、本当に山口先生嬉しかったと思います。

NA(女)私は学習会に行っているけど、3年生は3人しかいつもきてなくて、本当はあと1人か2人来るべき子がいるんだけど、その子、社会に出たら負けると思うから、意地でも学習会に連れてこなければいかんと思います。

SS(男)あと何ヶ月かすれば僕たちはばらばらになって、別々の高校に行くと思うけど、高校に行ったら、他の中学校の子といっぱい友だちになって、いろいろ話とかする中で、他の学校は板野中学校のように全体学習とかしていないから、差別のことも差別的なことを言うかもしれないけど、僕はそのときたぶん何も言い返せないと思います。今だって自分は部落出身でないからあまり関係がないって思うところも少しあるし、高校に行ったら今の友だちみたいな子もいなくなるだろうし、先生だってわかってくれる人も少ないと思うから、高校に行く前に今を頑張っておこうと思います。

MM(女)私は今日の3Cの授業を見ていて、うらやましく思いました。一人が意見を言えば何人もの人がつなげていって、今の3Bはそういうことができていないから、私は2学期になって

3Bで意見を言うのがすごく嫌でした。今も何か3Bで授業するのがすごくつらくて、意見を言えばどうしても涙が出てきて、その後意見をツなげてくれるのは、いつも一定の子だけです。他の子が自分のことをどう思っているのかっていうのがすごく気になるから、今、こうやって意見を言って座ったあと、本当に他の子がツなげてくれるのだろうか不安です。

YE(女)私もMさんと同じ意見で、このクラスで発表するのが嫌です。それは、いつもKさんやMさんばかりが手を挙げて、他の子は何も言っしてくれないし、応えてくれません。先生が強制的にあててからやっと言うのが精一杯で、みんな口を閉ざしてしまっています。他の授業中はさわがしいのに、みんな同和問題学習になったら手を挙げてくれなしい何も言っしてくれなくて、もうこのクラスで手を挙げる自信がなくなってきました。

TM(女)今B組の人が泣いているのを見て、すごく辛くなっただんですけど、頑張れって言いたいです。私の親戚で2人も結婚差別にあっただ人がいます。1人は男の人なんですけど、その男の人の奥さんは結婚に反対され、家出をしたような形になっています。もう1人はお姉さんなんですけど、結婚がうまくいっつて、そのお姉さんの結婚の話がうまくいっつたのは、そのお姉ちゃんに学歴があっただからっつて、私の母は私にそう言いました。学歴とか関係なしに、そういふうにただ部落に生まれただということだけで結婚を反対されるなんて、すごくいやだし悔しいと思っただし、前にM先生が言っただし、今の高2の人でM先生とS先生のところに「私は部落の人でない人と結婚したら、部落でなくなるのですか。」っつて聞きにきた先輩がいたそうなんですけど、私も少し前までそういう考え方をしっていました。そんな逃げたようなあまい考えをしっただし、でも今は考え方も変わっただし、自分が部落の人間だっつて告げて逃げていく人は、自分のことを本当に友だちとか思っしてくれなしい人だと思っただし、だから、私はこの全体学習をやらうとしていく中で、本当の友だちとかいうか、そういう切っつても切れない絆を3年生全体や板野中学校全体でつくっつていきたいと思っただし。

HM(女)この間学習会に行っつていて、すごく口惜しいなあっつて自分で思っただし、それは、一学期の学習会の部落問題学習のときに、先生もたくさんきていて、その時何かいっつぱい偉そうなこと言っただし、この間の学習会の時は、夏休みをはさんだせいか、心が冷めたっつていうか、意見が全然でなくて、自分もすごく情けなくなっただし、今日3Cの授業見っつていてすごいなあっつて感動しっつて、目を覚ましっつてくれたっつていうか、また頑張らなしいかんで思っただし。授業を見っつているうちに、本当に全体学習があっつてよかっただし、それで、夏休みの学習会の一泊研修のときに、1年生とか2年生の子の意見とか聞っつて、少しずつではあるけど、1年生も2年生も頑張っつていっつたなあっつて思っつて、いろんな話を聞っつていたら高校でもなかなか意見が言えなしい中でも頑張っつていっつた先輩とかいて、そんなこと聞っつていたら、私も頑張らなしいけなしいなあとか思っつて、今発表しっただし。

SY(女)みんなが今泣いているのは、私達が苦しめていっつたから泣いていっつたんだと思っただし。私はみんなにまだ支えられていっつたほうで、まだまだ弱い自分だけ、仲間を支えていけるようにならなしいです。

YY(女)この勉強をF組でする前に、親に「この資料読んでどう思っつた。」っつて聞っつたら、私の親は愛子さんと同じような考え方でした。期待しっつた言葉と全然違っつていて、私が一生懸命言っつていっつたのにわかっつてくれなくて、すごく悔しっつたです。

YH(女)私はいつもクラスの授業とか全体学習では、手を挙げるこができず、ずっつと下を向いっつてしまっつたんですけど、今、EさんやMさんに支えられたとかいうか、発表するこができて、これ

からもずっとみんなと一緒に頑張って発表していこうと思います。

KN(女) さっきのYさんに対してですが、Yさんはみんなが挙げてくれないから腹が立つとか、自分が発表してもしかたないとか、そんな考えをもっているみたいだけど、そうして自分もあきらめてしまったら何もしてないのと同じだと思います。自分が思うことをどんどん言っていたら、いつかは周りの人達もわかってくれると思うので、やっぱり発表ずっと続けていてほしいです。

KS(男) この全体学習が始まる前に、「今日先生が司会するからたくさん発表してよ。」って言ってましたけど、みんなが発表しなかったら司会する人も辛いし、司会者だけが頑張ってみんなが発表せんかったら、この学習が何も意味がなくなってくると思います。

T : 最初に言いましたが、授業をつくるのはみんなです。先生はその中の一人です。

YD(男) 今日の授業は3Cにとってすごくいい授業になったと思います。2、3日前に放課後、話し合いをしていて、みんな全然発表しなくて、山口先生を落ち込ませてしまいました。僕たちは本当に悪いことしたなあと思って、それがバネになって今日は本当に僕たちにとってはいい授業ができたと思います。そして、今日の授業見て周りの子がみんな3Cの授業は良かったとか言ってくれて、すごくうれしかったです。それと、さっきのB組の意見のことなんですけど、B組もこれから一人ひとりが頑張って自分の意見を言うていくことにより変わっていくことができるから、今日の僕たちの授業を見て一人でも変わっていく人がいてくれたらうれしいです。

UK(女) 昨日、私は同和問題の本を妹が学校から持って帰っていたので、少し読んだんですけど、そこに載っていたのは結婚差別にあった人のことについて書かれていました。その人の相手の親が反対しても、「自分は君を愛しているから結婚する」って言って、親の反対に負けずに結婚したんですけど、その人の相手のお父さんに会いに行くときは、奥さん一人だけが会いに行って、その人は花畑で仕事をしながら寂しく待っているんです。すごくその人の悲しみやくやしさが伝わってきます。

OA(女) 私はC組の授業を見て、すごくすばらしいなあって思いました。私たちのクラスはB組と同じで、先生が当てて発表するって形になっています。それで、先生たちにいろいろ私たちが抗議というか、抗議をしたので、先生を困らせてしまいました。先生もそれ以来変わってくれて、仲間もたくさん持てたし、これからも頑張っていこうと思います。

KH(女) Aさんが今言ったように、今、みんななぜかすごく冷めていて、今日の授業見ていたらすごくいいなあって、熱いものがこみ上げてきたなあと思って、少し夏休み中間があいていたので、冷めてしまったというか流されていたんだと思います。一学期のころのように間違ったことに闘っていけないようになっていたんだけど、今日の授業で、また、熱くなれたし自分たちから雰囲気をつくっていこうと思います。

NY(男) 1学期から同和問題学習をしてきたけど、1学期は全然発表できませんでした。2学期になって、先生にばかりずっと辛い思いをさせてしまいました。だから、これからは先生にばかり辛い思いをさせないで、自分を信じてくれる3Cの仲間と一歩ずつでもいいから、頑張ってすすんでいきたいと思いました。

OH(男) 僕たちのクラスは、発表はたくさんするってほどでもないけど、森口先生の熱意に圧倒されて、先生があれだけ訴えているんだから、僕たちも頑張らなければいけないという気持ちになって発表しています。僕たちもそれに応えきれるように頑張っていきたいと思っています。

EA(男)今日の朝の数学の時間に山口先生の授業があって「今日の全体学習頑張る。」って言うて、実際に授業が始まると先生だけでなくC組の人みんなが頑張っていたし、さっきも、S君が言っていたように石原先生の期待にも応えて頑張っているなあって思いました。ぼくも誰かの次でなくて、ぼくから一番に発表していく気持ちを持てるように頑張っていきたいと思えます。

AT(男)僕は差別のかたまりのような人間だけど、少しでもKさんとかMさんとかを支えて、発表するのを助けられるようになりたいと思えます。

YA(女)3Bの授業だったら、いつもKさんとかMさんが一番に発表してくれて、それからあとが続かなくて、先生が「列ごとに順番に一人ずつ発表していきなさい。」というふうになってしまっているので、当てられて発表するのではなく自分から言っていきたいです。

OK(男)さっき、Yさんが「この組で発表するのが辛い。」って言うてたけど、僕たちもできるだけがんばって自分の思いを言っていきたいと思うから、つなげていきたいと思うから、「辛い」なんてこれからは言わないでほしいです。

BY(男)さっき3Bの女子が言ってくれたように、今のままの3Bではいけないと思えます。だから、僕が3Bを変えていく一人になりたいです。

KM(女)私は1学期のときはたまにだけど、クラスで手を挙げるのができたけど、2学期になってから、1回も自分から手を挙げて発表することができませんでした。今日、3Bの友だちの話を聞いて、自分もここであきらめたり逃げてしまったら負けることになるから、クラスでも頑張っていきたいと思えます。

TK(女)今、私たちのクラスは1学期のころは決まった子ばかりが手を挙げていました。ついこの間2学期に初めてクラスで、この「私の目を見て」の資料を使って学習をしたんだけど、2学期になって誰も手を挙げる子がいなくて、たった一人しかいませんでした。今、私たちのクラスは発表して頑張っている子を支える子もないし、支えてもらっている子もない状態なんで、もっとみんなに手を挙げてほしいんだけど、私も2学期になって今のクラスの状態では、手を挙げるのができませんでした。もっと、みんなが自主的に手を挙げるぐらいになるぐらいまで挙げていきたいと思えました。

HK(女)私もEさんと同じで、道徳の時間とか先生が質問しているのに、全然それに応えようとせず、みんなが下向いてしまって資料とかに何も載っていないのに、下を向いて黙っています。先生は強制的に当てたりしないけど、みんなを信じてずっと待っていてくれたりして、先生の思いに応えていかなければいかんとか思うんですけど、言うことが頭の中だけで考え込んでしまって、忘れてしまったりしてずっとそのまま時間が過ぎたりするんだけど、今思ったら私達のクラスは私とEさんだけで、誰一人まだ発表してないから、今、発表しなければ自分がだめになると思って発表しました。

MK(女)今日、3Cが全体学習をするっていうのを昨日、先生から聞いて、山口先生が泣いていたっていうのを聞いて、あの先生が本物だっていうのを聞いて、昨日、私は山口先生に「頑張ってください。」みたいなことを言ったんだけど、クラスの子には言えなかったんだけど、先生や3Cのみんなを信じていてよかったなと思えました。それで、私も発表するって先生に言ったんだけど、時間中には言えませんでした。でもやっぱり言わなければ差別しているんだなって思いました。何も言わないで座っているのは傍観者だなあって思えます。

KK(女)私にもMさんとよく似た考えもあるし、今日はいつもはあまり発表しない子が、いっぱい

発表してくれて、その熱い思いに応えなければいけないと思って今発表しているんですけど、私は今日がその人たちのスタートだと思うし、自分もやっぱり一緒に一生懸命頑張っていかなければいけないと思うので、後、数ヶ月間でこの学校にいる仲間たちとも学習するのが終わってしまうので、高校に入っても負けないように頑張っていきたいと思います。

SA(男)僕は今、意見を言って、それでその意見をその後につなげげていかなあかんって思いました。

OM(女)さっきEさんやMさんが発表してくれたように、E組は本当に誰も発表しません。それで、この前も私は発表したんだけど、誰か私のあとに続けてくれるかなあってずっと待っていたけど、やっぱり誰も言わないままに終わってしまいました。それで、さっき3年C組のKさんが言っていたんですけど、自分が部落って言って離れていくような友だちは、本当の友だちでないって言ってたけど私もそう思います。だけど、それに付け加えて、本当の友だちでなくても、それが間違っていることをその子にわからせるってことも大切ちがうかなって思いました。E組で私も批判するだけでなく、それをみんなにわかってもらえるように頑張っていこうと思いました。

UT(女)私は部落問題学習は自分のためにやっているつもりでも、その反面、部落の子のためにやっているような気がします。友だちだけに頑張らずんじやなくて私先頭に立って頑張れるようにしたいです。それと、家でもこの問題にかかわって頑張りたいです。

T。：今の意見どうですか。

HK(女)私の本当の姿を知ってくれる、理解してくれる友だちが本当の友だちだと思います。部落出身だからって離れていくのは、本当の友だちと違うと思います。

SS(男)僕は今思ったんですけど、僕たち3年だけでなく今見にきている人達にも何か意見が聞きたいです。

OK(男)僕は人権部に入っているけど、はっきり言って差別のかたまりみたいな人間です。だけど、少しでも今の自分を変えていきたい。だから、今部落問題学習を頑張っている。誰かのためにしているんでない。自分のためだけにしているようなものです。そんな考え方はおかしいかもしれないけど、はっきり言って僕は自分のために部落問題学習をしています。

NM(女)勝子さんのようなことは私達が絶対に経験するのだと思います。そこで自分自身を偽って差別するか、勝子さんのようにその間違いに対して堂々と意見を言うかの二通りで、逃げてしまうのは部落の人ではなくって、やっぱりまわりでいる部落でない人が、悪口とか言うようになると思います。だから、部落差別をなくすのは自分たちの問題で、自分たちから差別意識をなくして間違いを正していくのが一番大切だと思います。部落出身でないからといって、部落差別は関係ないんじゃないかと、部落出身でないからこそ自分の問題として頑張っていかなければいけないと思います。それと、この場で発表できないのは、言葉を選んでいいことを言おうって思うからなかなか発表できないのだと思います。心に思っていることをそのまま発表すればいいのだと思います。

参会者：失礼いたします。今、みなさんの中から参会をしている人も何か意見をという話がありました。あつかましくも、ちょっと発言をさせていただきたいと思います。3年生C組のみなさんを中心にして、板野中学の3年生は一つになっているなあと、そういう思いを深くいたしました。そして、そのみなさんの熱い思いが、私達にも伝わってまいりました。みなさんの心の思いや痛みや、さまざまなその裏にある生活が私の、あるいは、私たちの生活と重

なって伝わってまいります。今みなさんが学習していることで、自分の思いを伝えていくことが非常に大切なんだなあという思いを、今勉強させていただいております。大事な時間をいただいているんですけども、私はM先生と同じ立場で、同じような仲間で、一緒に教師として、支えになるかならないか自分が中心になってこの問題を解決していく、その柱にならなければならないと思って、やっている一人でありますけれども、ちょうど長い間、30年ほど中学校でばかりおりました。現在は小学校なんですけれども、昭和53年ごろに同じような形で、住井すえさんの「橋のない川」を中心にして3年生のこういうふうな全体学習を12、3年前にしたのを、今、皆さんがやっているのを見せていただいて思い出しました。そのときから比べますと、皆さんの学習の深さというか、相手を思いやって、そして、発言をすることが解決をしていく第一歩だということが、そういう取り組みが私たちにひしひしと伝わってきて、そのたくましさというか、熱意というか、そういうものを大切にしていきたいなあ、私自身もそういうふうな思いをして聞かせていただいております。どうぞ、自信をもって発言をしていただけたらと思います。ありがとうございました。

SY(女) さっき出ていた意見で、本当の友だちをつくっていくという話なんです。先に私が部落出身っていうことを友だちに話して、その友だちが離れていくのだったら、私ははっきり言って、その友だちはいりません。でも、もし必要と思わない友だちでも、必要でない友だちってのもおかしいけど、そういう離れていった子が間違っただけの考え方もっているのは真実だし、離れていったままにはしたくない。きちんとわかってもらえるように努力したい。そして、世界中の人が、もし、部落を差別するのがあたりまえだとしても、一人でもいいから、一人ずつでもいいからわかってもらえるように頑張っていきたいと思う。

SK(男) 僕も、今、友だちにいろいろ差別をしているようなものだけど、僕の友だちで過去に差別をされたら暴力でなくしていった友だちがたくさんいるけど、僕は今の友だちを一応信じています。暴力ももう昔のようにふるわないようになったし、今の友だちを本当に心から信じていきたいです。

KJ(女) さっきのHさんの意見のことですが、私は友だちが部落出身だったとしても、その友だちとの友情は絶対なくならないと思います。

KA(女) さっき、私の友だちが言ってくれたことにお礼を言いたいです。ありがとう。それで、今から私達の生活の中でいろんなことが起こると思うけど、自分でやろうっていうか、差別に対しても自分から何かやろうって思っていたら絶対できると思うから、差別もなくそう思う自分があったらなくせるから、自分から、まず、自分から頑張っていきたいです。

NM(女) さっきHさんが発表したように、部落出身だからと言って差別する友だちはHさんの周りにはいないと思います。私はHさんの友だちでずっといたいと思います。

T : この一時間燃え続けていましたか。振り返ってみてください。自ら燃えようとしているのか。立ち上がろうとしているのか。誰かが頑張ってくれるとか、他の人が頑張らないから自分も頑張らないとか、そういうところがどこかなかったですか。

OS(男) クラスで発表をしたときに、発表をして聞かれないで発表をしつづけたら、3Bのクラスとかもみんな発表できるような雰囲気になると思います。

FM(女) 私は今の友だちを信じています。3年A組の仲間にしても、柔道部の仲間にしても、今、3年生全体の仲間にしても私が部落だと知って裏切る人はいないと思います。それと、どんなにすばらしい意見をもっていたとしても、言わなかったら仲間に伝わらないと思います。

あとで言っておけばよかったとか、そういう思いを残さないように今言ったほうが良いと思います。

KT(男)ずっと考えていたんだけど、A君の意見にずっと応えなければいけないと思っていて、ずっと今まで考えてました。でも、なかなか口に出せないし、それでも言わなければいけないと思うし、だから、今、言いました。僕はA君の本当の友だちになりたかったので言いました。

AS(男)友だちが部落出身だったとしても、それで差別するという事は人間として最低だと思えます。人間として恥ずかしいことだと思います。部落差別が間違っていることははっきりしていることです。それで差別をするのはおろかなこととしか言いようがありません。

YE(女)さっき、みんな、3Bの子が発表してくれて嬉しかったです。Kさんややっぱりあなたきびしいところがあるねえ。だけど、そういうきびしいところのあるKさんが、私は好きですよ。

MH(女)私は今日の全体学習、こんなにみんなが発表してくれるとは思いませんでした。いつもの学級でする話し合いでは、同じ子ばかりしか発表しなかったから、不安な気持ちでこの全体学習を迎えたんですけど、これだけ3Cの仲間が真剣に考えてくれて、発表してくれたことがすごい嬉しいです。

KN(女)私の言い方さっききびしかったかもしれないけど、今、Yさんが発表してくれて嬉しかったです。こういうふうに3Bのみんなも発表してくれるのだったら、少しぐらいきびしく言ってもいいかなと思いました。

TM(女)時間があまりなくて、長引くような話になるんですけど、夏休みのはじめに南会場の学習会に行っている仲間と他の学校の学習会の仲間と交流学習をしました。板野中学校と県内1校県外1校あわせて3校の仲間と、午前中と午後に分けて交流学習をしました。その午前中の交流学習会のときの話ですが、北淡町の子と板野中学校の2校でしたんですけど、そのときに4本指ってという言葉がでてきたんです。その言葉を聞いたのは初めてでなかったような気がして、そのときに、どっかで聞いたことがあるなあと感じていたんです。ある子が「それどういう意味ですか。」って聞いたら「4本指ってというのは昔、部落外の人が部落の人を差別するために使った言葉らしい。」っていうことを聞いて、私も4本指のこと聞いたことがあると思って、家に帰って森口先生の去年出した「よろこび」という本を見たら、「五本の指を」という丸岡さんの詩があって、その詩は全部覚えていないから、ここでは言えないけど、結婚差別の詩だったように思います。その詩を読んでいて、その日の午前中の4本指って言葉を思い出して、すごく辛くなって涙が止まりませんでした。その辛いって感じたのは、私は部落の人間だけど、ずっと5本指があるって思いながら、その詩を読んで部落差別をしている人にはその詩を受けて、そういうふうな、私は4本指に見えるかもしれないと思ったけど、けど、私にはちゃんと5本指があります。私たち部落の人間をそういうふうに4本指に例えることが辛いし、はがゆいし、絶対許せません。だから絶対部落差別をなくしていきたいと思ったし、そして、何よりもみんなこの学習をしていく中で、今は信じ合える、わかりあえる仲間がいるから辛いことないです。先週の土曜日に、学活の時間に話し合いをしたんですけど、そのとき、最後にO君が、言ってくれたことが嬉しかったので、その言葉をみんなに言ってあげてください。

OT(男)この前、A組の学活のとき自分の家のこと言ったんだけど、自分の親とか、たくさん間違った意見もっているんよ。それで、俺の家にしょっちゅう友だちが来るんだけど、そしたら板野は部落の人間が多いから、あんまり付き合うなとか言うから、それだったら、俺の友だちみんなばかにされてるように思うんで、親に言うたんよ。親が、部落の人のこと俺やより低い身分の人やと思うとるから、親に心の底から分かってもらえるように、勉強していこうと

思うとるんよ。みんなこの全体学習で、部落問題学習で、ほんまみんな結ばれているような、自分の発表した後につないでくれたら、すごい嬉しいんで、今度から自分も応える人間になって、みんなの後に続いていけるような人間になりたい。

T<sub>5</sub>: 今、4本指の話が出ました。まったく、ありもしないことを、さも「部落の人たちは」と言って4本指を出して、影でこそ言ったりします。自分でもわかってないことをそういうふうにして部落の人達を差別してきたのだと思います。どちらが人間として美しいでしょうか。よく考えてください。その人間の姿がどのようにみえるか。4本指を出して影でこそ言っては差別してきた人間とそんなきびしい部落差別の中を負けずにたくましく生きてきた部落の人達とどちらの人間が美しい生き方といえるだろうか、よく考えてもらいたいと思います。みなさんはすでによくわかっていると思いますが。えんえんと話が続きそうなんです。ぜひ、また学級の方に帰って、人に対して何ができるかではなくて、自分が何を語ることができるか、何を友だちに伝えなくてはいけないのか、自分はどんなことができるのかということを、しっかりと見つめて、そのことを一生懸命頑張ってみてください。そのことが、今差別と闘っている、部落問題が自分の問題になるということだと思います。

T(森口) 今日、Tさんが4本指の話を出しました。昔、先生は京都でね、初めて4本指を出されました。そういうふうにする差別があるということは頭で知っていました。でも、私が本当に非常に心を許した人がね、「森口さんあの人はこれでよ。」っていうふうに私の前に4本指を出されました。そのときは私が部落の人間だとその人は知りませんでした。だから、そのことを平然と出しました。その場で、下宿に帰って床に入った時に体が何回もふるえたのを忘れることができません。そのときにふるさとを離れて、私の暮らしを支えてくれる学費を出してくれた、父親のことを、母親のことを、また、そういう差別の中を生きてきた友のことを本当に思いました。私は本当にこのことと向き合いたい。このことと本当に闘っていきたくって思いました。そして、あのときほど徳島に帰ろうって思ったことはない。そんな中で、本当に自分を出していく、自分自身が本当に峠を越え、自分の中にある恐れやおびえをなくしていく生き方をしたいって思いました。悲しいかな、まだ、そういう差別がどこかに生きている。差別をしなければ生きられない、本当にこだわり続けている人達がいる。でも、我々は本当にささえ合え、本当に人間として大切にしたい。そんな人間社会を創っていきたくと思う。そういう差別することにこだわっている人間でさえ変えていける生き方ができるんだ。じっくりひざを突き合わせて、自分の思いを語り続けるんだ。人を変えていく力がみんなにある。この問題に取り組んでいる人、私を含めてついていくと思う。絶対に許さない生き方ができる。そして、こみあげてくる怒り。それを我々の生きていく糧として、つながっていく糧として、ほんとうに頑張っていきたいと思う。これは本当に大変なことなんです。この学習っていうのは、我々が本当に人間らしく生きていく、本物の人間として生きていくものであると思う。今日、山口先生が、3Cのみんなが燃やしてくれたもの、夏休みの長い期間を通してさめかけていたものが、また燃え上がる。それを、3Bがつなげていこう。3Eがつなげていこう。そして、僕たち私たちが本当につながったんだ。絶対差別をなくしつづけるんだ。そういう思いをもって頑張っていきたいと思います。

T(吉成) 一つだけ、資料にもどるけど、勝子が入社する前に、同僚の人たちが同和教育を受けていたらとか、あの工場で同和教育が徹底して推進されていたらとか、そういうことを思います。どうか、第2の勝子をつくらないように、そんな人間の一人になって欲しいと思います。これから進んでいく道でその一人目になって欲しいと思います。そんな人がいたら勝子はあんなことがなかったと思う。どうか、共に差別と闘う一人であってほしいと思います。